家庭雜誌

第六拾六號

副總裁鍋島侯爵令夫人◎本會贊成員の貴婦人方は會則に詳なり

大日本女學會

總裁に在せらる畏きあたりの尊名は事情有て當分揭けす

會員募集

目的 本會は家庭教育の本源たる女子教育の普及を圖らんが爲め通信教授の法によりて講義錄を發刊し小學卒業後入學すべき高等女學校の設け無き地方又は父母の許を離れ難き女子をして修學せしむるに在り其學科の程度は成るべく實用を主として平易に講述し務めて輕佻の風を避け一般婦人の智德を進め品位を高めんとを目的とす

講義錄 毎月十日、廿五日の二回に發刊す一回の紙數は菊判八十頁以上とす毎卷鮮麗の圖畫を挿入す

會費 は一ヶ月金參拾錢とす入會の節は別に入會金參拾錢を要す

◎揭載科目及擔任講師

● 修身
貞淑の德を涵養せしめんが爲め第一に此科を置く　日本弘道會長　西村茂樹君

● 國文
女子の心得となるへき近世學者の普通文を俗解し以て普通の國文に通暢せしむ　華族女學校教授　關根正直君

● 作歌
初に之を詠する心得を述べ次に歌題の意義を釋き且其作例を添ふ　華族女學校教授　阪正臣君

● 地理及歷史
繁簡の中庸を取り平易明瞭に講義す　大學院在學文學士　大森金五郎君

● 理科
普通の事物を採りて其性質、變化、勢力等を勉めて平易に講述す　工學士　近藤會次郎君

● 博物
動植物の家庭教育に必要なる者を載せ母たり姉たる者をして子女に說明を爲すの便を得せしむ　理學博士　石川千代松君

● 作文
女子書翰文の標準を示し熟達の便を與ふ　城北中學校長　今泉定介君

● 習字
石版摺の手本を與へ懇切に書法を說明し面のあたり其師に就いて學ぶが如く容易く習熟せしめ又淸書の批評を爲す　御歌所勤務　大口鯛二君

● 家事經濟
衣食住に關する一切の家事管理の道を講し後に家計簿記に及ぶ　女子高等師範學校教諭　後閑菊野君

● 育兒
三育の要旨に基つき胎兒初生兒哺乳兒乳齒兒學齡兒の五期に分ちて其心得を說く　女子高等師範學校教諭　後閑菊野君

● 家庭教育
其本體を說き世人の誤謬を正し次に完全なる方法及標準を示す　三輪田眞佐子君

● 生理及衞生
人體の組織機關及其健康上の注意を講す　醫學士　吳秀三君

● 看護
病人に對する一般の心得及方法等を講す　醫學士　吳秀三君

● 禮法
家族師友服裝接客訪問饗應儀式を始め起居進退物品の授受進撤又は供饌に關する事項を簡明に講述す　女子高等師範學校教授　佐方鎭子君

● 裁縫
裁方縫方に關する事柄を綿密に講話す　共立女子職業學校教師　渡邊辰五郎君

● 割烹
普通料理を始め後に和洋折衷の法を述ぶ　元華族女學校講師　田邊和氣子君

● 活花
四季の花普通の挿方を述ぶ　元華族女學校講師　田邊和氣子君

● 點茶
夏冬游茶濃茶の手前普通棚物扱並に會席順序主客の心得等を述ぶ　元華族女學校講師　田邊和氣子君

● 小說（伊賀局）
正史實傳を基とし貞烈女子の心情行實の隱微を發露し淫猥卑俗の者と其撰異なり　依田學海君

● 詞藻　● 雜錄　● 雜報

◎詳細なる**會則**入用の向は郵便切手貳錢を封入して申込まるべし

本月に限り**初卷廿日**、**貳卷卅日**發刊す

東京市麹町區土手三番町廿八番地　**大日本女學會**

家庭叢書全部拾貳册完成

家庭叢書
號外
名士と家庭
一部十錢
郵稅二錢

本書は家庭叢書の號外として發刊せられたるものにして古今の名士が家庭に於ける生立を說き盡くして甚だ詳なり世の妻たるもの若くは母たるもの之れを座右に供へたらむには其の益尠からざるべし(國會)●家庭叢書の號外として出づ那翁ヂスレリー、曾我兄弟ビスマーク吉田松陰等の諸名士が家庭に於ける言行を敍述して興味深し(中央)●ナポレオン、ビーコンジスフヒールド等十名士と其の家庭を敍したり、之を讀むときは此等名士の業を成し、名を著はすの偶然ならざるを知るに足れり(經濟雜誌)●家庭叢書の號外にてナポレオン、ミルトン、吉田松陰、ユーゴー外數名士と其家庭との關係を面白く敍述したるものなり(毎日)●「家庭叢書」の號外體裁すべて例の如し第一に名士と家庭との關係を總論し(二)にナポレオンとジヨセフインとの關係(三)にビーコンスフヒールドと其の妻(四)にガリバルヂーの妻(五)にミルトン夫妻(六)に曾我兄弟(七)にビスマルクの家庭(八)に勤儉の名士(九)に吉田松陰(十)にベルモンチエーの幼時(十一)にユーゴー(十二)に結論といふ順序にて平明に敍說せり簡略にして何人にもわかり易くまた面白味の感せらるゝ讀物なり(早稻田文學)●家庭は人力を培養する所以の肥料土なり人と家庭との間に重大の關係あるや明かなり本書は家庭叢書の號外として此大趣旨の下に那翁夫妻、ヂスレーリー夫妻、ガルバルヂー夫妻、曾我兄弟、吉田松陰、徵候、ユーゴー、の家庭に於る關係を歷敍せり着眼の警拔、撰擇の精良、一編の好册子なり(報知新聞)

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

第一巻 家庭の和樂
第二巻 夏の家庭
第三巻 玩具と遊戲
第四巻 家庭教育
第五巻 小兒養育
第六巻 家庭衛生
第七巻 家政整理
第八巻 簡易料理
第九巻 社交一斑
第十巻 婦人と職業
號外 家庭理財

定價各拾錢郵稅各貳錢

發兌元 東京市京橋區日吉町 民友社

塚越芳太郎著

近松著作一斑

上卷

製本鮮麗　紙數五百十頁　定價金三十五錢　郵税金八錢

上卷目錄

●第一、近松の著作◎(一)彼が著作の類別○史戯曲○社會戯曲○史戯曲と社會戯曲◎(二)彼が戯曲の躰○如何に唱歌すべく適當なる躰を有する乎○如何に演劇すべく適當なる躰を有する乎◎(三)彼が戯曲の躰の進歩◎(四)彼が戯曲の想○戯曲の主意○人物の性情◎(五)彼が戯曲の想の開展○彼が戯曲の効果○彼が戯曲より學び得べき敎訓○彼が戯曲より學び得べき歴史○彼が戯曲より學び得べき文學●第二、彼の史戯曲◎「雪女五枚羽子板」解剖◎「曾我會稽山」解剖◎「國姓爺合戰」解剖◎「關八州繋馬」解剖

今や征戰漸く收まりて文學時代來らんとす世は方に大なる渴望を以て新戯曲を待ちつゝあるものゝ如し新戯曲を待つものは先づ舊戯曲を知らざるべからず舊戯曲を知らんとするものは先づ巣林子の戯曲を知らざるべからず巣林子の戯曲は實に舊日本戯曲の絶頂なれば也巣林子の戯曲は實に日本二千年間に於ける文章の花なれば也

各新聞雜誌の批評如左

◎經濟雜誌曰く　此卷には近松の史戯曲を評釋したり停春樓主人の批評眼例に依て深刻なり

◎東京朝日曰く　曩に『近松門左衛門』を著して世の喝采を博したる塚越芳太郎氏の著にして近松著作の類別より戯曲の躰、戯曲の想、戯曲の効果並に史戯曲の事に至るまでを本卷に擧げたり氏の前著は單に近松が生涯思想等に就て大綱を擧げしに過ぎず本書は之を補ふが爲め其著作一斑を細説せる者にして兩者相俟て始て完全無缺を得る者なり近來文學上の著作多しと雖も本書の如く考察調査の精を究むる者非ず實に文壇必須の著にして近松亦た地下に知己を得たるを謝するならん」

◎大坂朝日曰く　『近松門左衛門』の著者停春樓主人塚越芳太郎氏巣林子が著作に就て前著匱かに單簡なる解題を施こせるに止めたるを此には其細を極め精を盡して研究の手眼を示せり而して尙題して一斑といふもの蓋し謙也今上卷を出す其體裁先づ著作の類別、戯曲の體、其進步、其想、其開展、戯曲の効果等に就て堅說横說發揮餘蘊なし次に其史戯曲中の雪女、國姓爺、會稽山、繋馬の四種を解剖し毫を析ち微に入り原作の神氣躍然たり近來巣林子の著作を把りて其解題、批評等を公にせしもの世に其人多し然れども皆片鱗隻甲のみ未だ全體の大に亘りて之を研究せしものあらず著者既に前著に於て巣林子の人を傳し想を叙じ今又此大解釋あり下卷の完成を見んと樂しむ意ふに巣林子全集の此盛著に對讀すべきもの未だ之あらず豈一大恨事ならずや著者其れ餘力之を成せ

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

本社電話番號七十番

發行兼印刷人　金子佐治郎
編輯人　金子佐平

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治廿八年十一月二十五日發行

家庭雜誌第六拾六號

目錄



家庭雜誌第六拾六號

(明治廿八年十一月廿五日發兌)

社説

生活費と事務費とを區別すべきこと

人間の生涯は、戰爭の如き者と心得て、扨思案すべきは如何にして此戰爭を續くべきやと云ふことなり。世間には好運にのみ會ひて、世の中はくらし善き者なりとなし、少しも未來の用意をすることなく衣食に奢る者あれどこは世の有狀を知らぬ浮きたる考なり。人間の一生は斯樣なる安易なる者に非ず、いかなる有福の家にても衰微の運は免れざる者なり。

昔し白樂天は人の家の榮枯常なきを觀じ、昨日の主人は今日の主人に非ず。子孫の代に至るまで永久に捿ひべしと期したる邸第も忽ち他人の物となるを見て大半主人非なりと詠じたるがかゝる感慨は今日も同じことなり。ボストンと云へる合衆國の大都會にて經驗ある商人の話に余が知れる百人の商賈中、終始人の世話にならず獨立の營業を爲し得たるは僅かに三人なりといへり。人の一生は利運のみに非ず。病氣に罹ることもあるべし、世間の受け惡しき時もあるべし、相場の變動より生ずる不景氣もあるべし、否必ず有る者なれば時には非常なる難儀に遇ふことを覺悟せざるべからず。……かく非常なる難儀に對して豫じめ防禦の策を講じ置かねば善く世に處する者とは云ひ難し。余輩思ふにこは平時の心掛にあり。いたずらに思慮を勞したりとて、猿も木より落ち、上手の手より水のこぼるゝ習ひなれば、智術にてかゝる難儀を免るべきを必ずべからず。たゞ平日よく質素儉約を以て一身を處し、粗衣淡食に甘んずるの慣習をつけ置くの外に道なし、かくせば少

しも周章することなくて濟むべし。平常嚴に生活費と事務費とを區別し、生活には極めて質撲を守るべし。たとへいか程多額の收入あればとて生活は猶一個の平民として滿足すべし。決して其收入の大部分を以て奢侈に濫費すること勿れ。月に百金の收入ある身なれば毎日美味に飽きたりとて敢て身上にさはる程のことにあらねど、人生の運命は必らず常に斯の如しときまり居る者に非れば或ひは何の收入もなき位地に落つることもなきに非るべし。此時に際して平生好味を食したる者が急に茶漬飯は食ひ兼ぬる者なり。されば身上の零落と共に生活までも零落し、貧すれば鈍して心まで貧乏する者なり。之に反して若し平生淡泊に安んじたる者ならんか不時の災難は何の苦もなく切り拔け得べし。多くの收入を得るは人の技倆に因ることにて、たとへば我にどれ程の才力ありとも子孫必らず之を遺傳すと限るべからず。さればたとひ一生安樂に暮らし得べき見込つきたりとも深く子孫を思ふ者は猶其生活の度を進むることに躊躇すべき筈なり。

勝敗は兵家の常、事業の成否は必しも其人の才能にも因らぬことなれば、たとひ如何程の失敗を爲したりとて直ちに之を笑ふべきに非ず。されば大阪あたりの大商人はたとひ一時に萬金の損失を爲したりとて敢て怪しまず。同輩も亦尤めざれども奢侈の爲めに身上を破りたりとあつては是れ戰爭の失敗にあらず、空しく口腹の爲めに商人の本城を失ひたる者なれば大耻辱として之を嗤笑することなり。これ誠に尤なる次第なりと云ふべし。我等は事業の爲めに如何ほどの金を失ふとも、こは經驗を買ひたる者なればこれを無益のことは思はず、たゞ奢侈の爲めに金を徒費する者を憫まざらんと欲するも得ざるなり。

幕府が倒れし後、最も醜態を現せしは高祿の旗本にして從來祿寡かりし輕賤の輩は却つて武士の面目を保ち

しは此理に因るなり。千石以上の旗本は其生活極めて高く美服を着け、好味を味ふことに慣れしかば一旦祿を剝がれて後も猶生活費の爲めに其産業の多分を失ふて事業に用ふることを得ざりしなり。其頃士族の商法とて笑ひ話の種となりしは必しも士族が商法の掛引に下手なりしが爲めのみには非ず。士族の生活が一躰に平民の生活より高かりしが故に、同じ利得にても生活の爲めに空費せらるゝ資本の多かりし故なり。

一家の主婦たる者はよく此理を合點して、成るべく生活費を節約し良人の收入多くなりしが爲めに生活も高くすべしなどゝ誤り考ふべからず。士人には士人らしき生活あり。農夫には農夫らしき生活あり。商人には商人らしき生活あり。いかほどの收入ありとてよく其分を守りて人並にし決して不相應なる奢侈を爲すべからず。家にいかなる災難ありともこれほどの暮しなればいつにても續け得べしとの見込を立て、これより上に越ゆること勿れ。かくせば其良人は始めて安心して力を其事業に用ふることを得べきなり。

野邊の千草

秋の野に、千草の花咲き亂れて、互に其美を競ひ、桔梗は「各々方如何に誇るとも、色の鮮かなること、我に及ぶものあるまじ、第一の名譽は宜しく我に與ふべし」といひ、萩は「其はきこえぬことかな、秋といへば、我名の共に出でぬことなし、花の美にして、風姿の雅なるは、誰れか能く我に及ぶべき、第一の位を得る者は、我を措いて、他にあるべき筈なし」といひ、



女郎花は「風姿といへば、述ふるも恥かしき事ながら、わが窈窕かなる姿の、人に愛せらるゝは、皆しらるゝ所ならん、又其上に、わが蕾の淡き色は、奥ゆかしく見ゐて、飾らぬ中に限りなき趣あるなり」といひ、薄は「否々、飾らずして、自然の品あるは我身なり、招く尾花の秋に

伴ひ、常に歌人の目に留まるは、隠れなき事柄ならずや」といひ、
撫子は「我身を忘れ給ふな、我が麗はしくして、愛らしきは、各々方の上にあるなり」といひ、
朝顔は「我が花の鮮かなるは、誰にも劣らず、しかして其の盛りの長きは、我に如くものなし」といひ、
此外刈萱、葛、藤袴の類も、各々其長所を述べ、互に下るべき様子も見えざりけるとき、叢を分けて、秋の神は入り來り「我子等よ、無益の争を止めよ、秋の景色の勝れたるは、汝等個々の力にあらずして、皆打ち揃ひて後、色取の配合の能く整へるにあるなり、何事も和合の美なるは、様々異なりたるものゝ、互に相助け相補ひて、全體相一致するに基す」と、諭し聞かせけり。

史談

富士野の讐（二）

嵯峨のや主人

第五　曾我兄弟の母親

曾我の若殿原は、富士の裾野の巻狩の夜、親の讐の祐經を討て、名を後代に輝した勇士孝子として、其家庭には如何なる母親を持て居ましたらう？　左様、始は鹿野の某に嫁して一男一女を擧げ、次には河津の助通に嫁して曾我兄弟と久上の禪師坊とを擧げ、後には曾我太郎祐信に嫁して夥多の子供を設けた婦人、其が兄弟の母親でした。彼女は決して貞婦節婦とは言はれない、が然し其胸中には坂東武者の血液の、慥に流通して居た氣丈の婦人でした。彼女は助通の不幸に死するや、むなしき死骸にそひ伏して、ひとつ道にとこがれたる、その折ふしは懐妊にて、まゝならぬ身を恨みました、が其に附ても憎くきは讐の工藤、己れ一太刀なりと恨みの餘り、三歳の箱王を懐にかゝへ、五歳の一萬を膝下に置て、汝等が廿歳にならざる前、祐經の首をとッてわれに見せよと歎きました。

其後腹の子は安らかに産落したが、之を育てようといふ心もなく、生絹の單におしつゝんで、野原に捨よと

いふたのも、畢竟世を憤り身を恨から。ひたすら出家の望み計、袈裟衣をさへ用意して、亡夫の百ヶ日の



過ぐるを待て居ました。が其も眞入道の諫に依て思ひ止り、心ならずも曾我太郎の元へ、再び輿入する事

となりました。然し彼女は曾我へ嫁して後も、先夫河津に對するの愛情は、終生薄らく樣子もなく、事に附け折にふれては思ひ出して、涙の種となりました。彼女は兄弟の讐討には、始より全然反對でした、故に其きざしを見るに就けては、之を諫むる事幾度でしたらう？　其後箱王は出家させん、と箱根の山へさへ押登せました。而して箱王の出家を嫌ッて山を降り、北條時政を賴んで男になるや、彼女は憤ッて之を勘當しました。其時の言葉に「あな口惜しき者の有樣かな、何のいつくしみに男になりたるぞ、十郎さへ法師になさゞる事を、安からず思ひ居たる所に、あの者さへ男に成たる悲しさよ、今日よりして親ありと思ふべからず、我も子を持たりとも思ふまじきぞ、何方足に任せて行失べし、中々あの形を見るも口惜しゝ、あはれ河津殿程、果報少き人はなし、いまだ盛の時に散り、さらば只も死ずして、弓矢にかゝりて、修羅の苦患を受給ふらんと悲しきに、また〳〵一人の子を法師になし、合戰の苦をも、助け奉らんと思へば、案に相違して、男になりぬ……されば經にも、一子出家すれば、七世の父母を助くと說きたり、あの者こそ法師になり、河津殿の後世を助け奉らんと思ひしに、思ひの外の躰を見ることそ悲しけれ、」と泣々內へ入ッたとある、是れ親子意見の衝突にて、勘當とは如何に雄々しき心でせう。

然し彼女の心になッて見れば、當時工藤は君の御覺目出度き者、見る影もなき曾我の分際にて、之を討んなぞといふ心の兄弟にあること、若し祐經の耳にでも入らうものならば、其こそ一大事、兄弟の身の危きは勿論、夫祐信にもよき事はなからう、まいて兄弟の者は鎌倉殿につらかりし故入道殿の孫に當れば、君に於ても忌み嫌はれ、既に先年も鎌倉に召されしを、夫祐信石橋山の功名にかへて助命を願ひ、やう〳〵今日迄

無事なるを、今若かゝる企のありと知れたら、よも安穩にては居られまい、二人の子の命を召されし上、夫の身にも不祥の事あッたなら、其こそ悔ゆるとも及ぶまいとは、是彼女の心でせう、是を思へば、當時彼女の前後左右を顧みて、如何に苦心した歟といふ事も思ひやられます。

五郎勘當の後は、十郎も家にある事少く、多くは兄弟打連て、親類先を其から其と、泊り歩て計居ました、其後五郎が勘當の許されたのは、富士野出立數日前の事で、其時も二人は讐討のかの字も言はなかッた、故に母親は露計も其を知らず、快く門出の盃を汲みかはし、種々の事濃々と說き諭し、扨其の身も籬際迄立出で、出でゆく二人の後姿を見送りて「あれ見給へ女房達、親の立添て敎ねどもあれ程に物をも射、馬にも乘よ、あはれ故河津殿御坐あらば、いか計歟人も持ざる息子を、持たる樣に思給ふべし、よしとて讃る人もなく、惡しとて敎ゆる者もなし、されば明暮物思ふ氣色に見ゆるも理哉、亡父のおもかげは思ひ出られて悲しさよ、此等は皆丈も骨柄も、遙父には勝たり、五郎も山寺に成長したれども、色黑くまみて見ゆる、十郎は里に成長したれども、色白くすべやかなり、我子なればやよからん、片輪成子も親の眼には能見ゆる物をと、打笑て宣へば、女房達も皆一同に譽にける」とあるを見ても、彼女は二人が狩場の門出を以て、當時の若殿原が、前代未聞の大卷狩なれば、吾も〳〵と富士野をさして赴いた、其と異なる心なしと思ッて居たので、讐討とは思ひも寄らなかッたのです。

されば鬼王斷三の兩人が、富士の裾野より引返し、兄弟が討死を告ぐるや、彼女は夢ともわきまへず、大庭に走り出で、「二つの文どもを取並べて、讀んとしけるが、淚にくれて見も分ず、掻走て胸に當てぞ焦ける、まこと凡夫の習程口惜きものはなし、此小袖どもをば、

最後の紀念と思ひて乞けんを、急ぎ返せと、云ける事の悲しさよ、殊に五郎が事、今を限りと思ひければこそ、十郎わりなく云つらん、久しく見ねば、責て二三日も留置んと思ひしに、頓て歸り參らんと云しが、一入無慙に覺えつるぞとて、絶入り絶入り歎ける」と有ます。

燒野の雉子、夜の鶴、親の子を思ふ心は誰しも同じ事ながら、彼女は殊更深くありました、されば兄弟討死の後は、二の宮の姉御前、早川の伯母御前など打寄てありし時の事、言ひ出し語り繼て、歎く事大方ならず、倘兄弟が佛事の爲にとて、大磯の虎と共に箱根へ登り、別當を導師に賴みて、懇ろに其後を弔らひました。其道すがらも、鞠小川に打望みては、兄弟が吟詠を聞て、

玉さかに行かふ道の涙川
　波の立てるに袖くちぬべし

と詠みて泣き、又矢立の杉に近附し時、團三郎が指して、「あれ御覽候へ、東の枝に矢の候は、十郎殿の御調度、西の中枝なるは、五郎殿の」と言ふに、彼女は唯一目見たヰ、鞍の前輪にひれふして、流るゝ涙露ふかく

見るからに憂こそ增れ足曳の
　矢立の杉に殘る形見を

と詠みました。其箱根へ登りて、五郎が箱王の昔住みしといふ一間を打見やり、其處の壁に付たる裏板の下長押に、

出ていなは心輕しと云やせん
　世の有樣を人のしらねは

とある五郎が筆の跡を眺めては、如何になげきこがれてもだへましたらう。彼女は兄弟が三回忌の當日を以て尼になり、兄弟の菩提を弔らふこと怠らず、斯て正治元年五月廿八日其曉の霜をも見ず、大往生を遂ました。

第六 兄弟の家庭(其一)

父助通の死だ時は、箱王は僅に三歳、一萬はやう〳〵五歳の時でした、が五歳の一萬が、其淡々とした小さな心の中に、如何程深く父を愛し、又如何程固く讐討の望が有た歟といふのは、左の事實に依ても分ります。

母が二人の子を膝元に引着て、予れら廿歳にもなつたら、是非敵佑經を討て、父の御墓に備へよ、と言ッた時、箱王の五郎は無心で手ずさみをして居たが、十郎の一萬は、父の死體をつく〴〵と見て、涙にかきくれながら、吾若十五歳にもなりたらば、必ず敵佑經を狙はん、願はくば二所權現、及び三島大明神、殊には我氏の大神、力を合せて守らせ給へ、とおめき叫びて歎たと言ひます。

又助通が三十五日の日、彼は父の手馴た蟇目鞭や、草で束ねた鹿のまき藁なぞ取出して、これは父の殘した調度なるが、我も十七八になッたなら、此具足を身に附て、父の敵を討つべきに、我身おさなきこそ悲しけれといふに母は悲しさ身にこたへながら、「いかに一萬よ、亡人のをばいとけなき者は持ぬものぞ、みな棄よ、御身が父は佛となりて、極樂淨土と申して、面白き所に榮えおはします、我も遂には、そこへ參り合はんと願ふなり、といひければ一萬は之を聞き、佛は何處に渡らせたまふやらん、母御前いざゝせ給へ、乳母もいそぎいでたちて、我をも具せよ、箱王殿の乳母はなき歟、とく〳〵抱きて、母御前の御供にまゐれ、はや〳〵いざゝせ給へ、父御前の戀しくおはしますにと、母と乳母にとり着て、ひよやかなる聲にてなきければ、母は陳じ述ん方もなく、人はなき歟、此子をとれと計にて、また打伏てもだへける、祖父伊東入道は、餘りの事の悲しさに、一萬を招き寄せ、卒都婆の方を指さして、あれこそ汝の父よ、といひければ、一萬は走りより、卒都婆のめぐり、あなたこなたを尋ね、また祖父

が肩にとりつきつゝ、あの佛の中には、父はおはしまさぬ、あな父こひしや」と泣悲しみました、人々これを見て、涙を流さぬはなかッたとあります。

又曾我の里へ移り住む時も、父河津の墓へ詣り、志るしの五輪にとりついて、彼は楓の様な手を合せ「祖父御前の仰せによりて、母御前の御供仕り、曾我の里へまゐり候ふ、御敵工藤一郎佑經を討んまでは、息災に守らせたまへ」となく〳〵口説いたと有ます。

是等は總て彼が河津の庄に在る時の家庭の有様です。

思ふに彼は伊東河津兩庄の若様として、夥多の奴婢にかしづかれ、世に時めいて居たのでせう、然し五歳の小兒を以て、弓矢まき藁をとりまわし、物射る眞似をして遊んで居たといふのを見れば、彼は柔弱なる婦人の手に育てられたのではなく、剛勇無双の坂東武士的敎育を受て居たのに違ひありません、其父を慕ふ條に、乳母もいそぎて我を具せよ、箱王殿の乳母はなき歟、とく〳〵抱きて母御前の御供にまゐれ、といふのを見ても、彼は事に當りて己の意志を貫き、人を指麾するの氣象を示して居ます、然も其を戀ふ心の中には、如何に愛らしいやさしい情愛が現はれ、又其讐を憎む心の中には、如何に武勇の氣象が現はれて居ませう歟、十郎が幼稚の氣象は、實に後年父の仇を討て名を天下に擧ぐる、發達後の十郎、母に孝心深く、弟に愛厚く、苟の契なる大磯の虎にさへ、情の濃で有た發達後の十郎を約束して居ます。然し伊東の庄の家庭に於ては、單に十郎の舞臺に在る計、五郎は何の意志をも現はして居ません、我々は既に彼等が伊東の庄の家庭を見ました。是よりは曾我の里へ移りて後の家庭を見ませう。其處には五郎も既に場へ登ッて居ります。

盲者を相したる盲者

讃美生

余は今盲者を相したる盲者、エリザベス、ギルバート孃を紹介するの機會を得たり。

語に曰く、盲者は盲者を相する能はずと。然れども是は唯形に就て言へるのみ一樣不幸の境遇に沈めるものに與ふるに、多福なる有益なる進路を以てするとに於て、誰か、精神あり同感あり、希望ある盲者に如むや、

ギルバート孃はキチェスター州の一牧師の女にして、千八百二十六年、オックスフォールドに於て生れぬ。彼は腹からの盲目にあらず。彼は嬰兒たりし時に就て、彼は黒く閃めく眼を具し、他の嬰兒の如く看る一噴りと餘さる、彼の眼はこの世の光を見しより、二歳八ヶ月にして、劇しき赤熱の爲に失はれたるなり。その以前女は產室に隱れありて、この幼き患者より隔てられ、獨り父なる牧師の看護にのみ委ねられしかば、父親は非常の苦心を以て、其命をば取り留めたるか、危篤の病の去りたる後、憐れなる小女の、明を喪ひたるとの發見せられぬ。竭くさるべきの療治は竭くされ、眼科醫と云ふ眼科醫には皆咨られぬ。然れどもその結果は、彼が、生れつかぬ盲婦なるとを確かむる外、一の惠報を答へざりき。失明と云ふ一の大なる不幸を除くほかには、孃の幼時は特に幸福なりしなり。彼れの二親は竭せる限の手を竭して、他の兒女同樣に彼を教育し、大勢の家族は、社會に推し出す通則なる、自助と自活の路に、漸々慣らされぬ。

彼れが盲人社會の恩人として休徵を現はじたるは是なり。彼は常に父なる牧師の傍に坐して、其盃に酒を酌むが例なりけるが、彼の之を爲すと、一點滴をこぼすとなき程に器用なりき。彼は人の問ふに答へて、是はいと易々たる事にて、酒の盃に充る時の重量に由つて判ずるなりと曰ひき。かくて彼は猶ほ他の同胞の爲る如く、佛蘭西語を學び、日耳曼語を學び、伊太利語を學ひ、音樂を學びて之を得たり、又能く內外の遊戲に於て渠

等に加はりぬ。その稍長ずるに及んでは、兩親の不在毎に、他の姉妹と、交番に家庭の務に任じ得しなり。彼は此等の經驗に由つて自活の氣象を贏ち得、然して斯くして贏ち得たる自活の氣象こそ、後來、世の盲者の前に、自から薦めたりし素なりけるなれ。

然り然して彼の性情の獨立を完成せしむるの幸事、千八百四十二年に於て起りぬ。此年に於て彼の祖母なる婦歿り彼に莫大なる遺產を貽したり。彼が其の天職を全ふすることに於て、生活の困難より彼を自由ならしめしは、この惠みある贈物なりしなり。

然れども彼の小供あがりより、其の懲を感ずるに至るまでは、いと憫れなる身の上なりき。彼は八人の姉妹の一にて、彼等の次第に童女より處女に生ひたつまゝに、次第に家庭より社會に移れり、されどその社會は彼が爲に閉されたるなり。彼等は次ぎ〳〵に男を擇み、次ぎ〳〵に社會より第二の家庭に移れり。然してその第二の家庭は、彼が爲に、望むべくして入るべからざる處なりしなり。當時の社會が妙き婦人の前に拓きたる進路唯婚嫁の一途にて、婚嫁せざる婦人に對しては殆ど地位と事業を備へず殊に盲者に對して同情を有するものすら、其の速かに天國に僊されんことを願ふ有樣なりしかば、此時に於て彼を知るものは、皆、彼が父の家の、客室より孤り離れて、無言に坐してありしと、彼の白き目より、淚滴面を下りしこととを一致するなり。聖語に之あり『正しきものには、闇に於て光あり』と。彼は絕望の庭に於て、凡て同じ不幸の地に立つもの〻哀を、一身に引くらべて、思ひやりぬ。嗚呼是れ彼が、闇に於て認めたる光なりけり。彼は他の幸福、利益の爲に働くことの、如何に幸福にして有益なる生涯なるべきやを發見したり。彼が世の同じ不幸のもの〻方に身を献ぜんの念、是に於て衷より與れり。

既に前に陳べたるが如く、當時の社會は猶ほ盲者を冷

遇して、然るべき學校とて、渠等の爲に建てたるものいとも少なかりき。故に盲者にして貧しきものは、概して乞丐兒に墮ち、その自活し得るものは、指にも上らぬほどなりき。然して中に就て最も憐むべきは、成人の盲者にして、渠等はその失明前の生活よりして、一朝に脫却さるゝなり。音樂は渠等に適する所、然れども其造詣を得んには、幼時よりの修錬なかるべからず。幼時に於て明を失ひしものは、能く音樂の教育を授けて、自活の途に就かしむべきも長じて明を失ひしものは、其澤を受くるに遑あらず。獨り然るのみならず、全く音樂の嗜好なきものすら、渠等の多數を占むるをや。

孃が、爲に特別に竭したるは、貧しき成人盲者の爲なりき。彼は當時の世論が不能として盲者を杜絶せし生業の中に、種々の手細工的勞作を發見するに熱中して、遂に自らホルボルンに於ける某の窖らを、一週間一シルリング、六片、の拂にて借り、始めて玆處に開店せり。その窖は盲人等の各自其家にて製作したる莚、籃、刷毛等の物品を貯蓄する所にて、彼の店にて、數多の盲者を使用して、是等の物品を作り且つ賣らしめたり、彼の目的は。盲人に實業を與ふるにありしなり。

是より先き佛人フホーコールなるもの、盲人に書くとを得せしむるの器械を發明して、大に盲人社會を益せしかば、孃は此便利に賴つて、セントヂョン訓盲院の職員にして、盲者なる井リヤム、ハンクス、レ井ーと通信するとを得たり、是よりレ井ーは熱心なる彼の幇助者となれり、彼が窖に開店するや、渠又直ちに其例を追へり。他に猶ほフヘラーと呼べる盲目大工又た其例を追ひ、一時大に世人の注目を引き、其の商品の他よりも佳良なるが爲に着々として信用を博し、一般の同情は盲人の作れる物品を盲人より買ふものを増し、其得意の版圖は着々として擴張したりしかば、年を出で

ずしてブランスヰックに移り、尋でユーストンロードに於て店と工場を建つるに至れり。

然れども盲人にして能く商買たるを得るを證するに至りしまでには、苦しき經驗を歷さるべからざりしなり。何となれば盲人は一躰に其健康見ゆるものに及ばざると、然して其多數は、勞作するよりも寧ろ乞丐するの怠れるを主張するが如き無頼漢なりしかば、彼及び其友レヰーは工作上に、躰格上に、道德上に、經々其徒弟と諍はざるべからざりしなり。斯くて渠等の勞作と商買の得る所、最初數年の間は、失ふ所を償ふ能はざりしかば、其間の負債は、孃自身の私費を以て之を辨償しき。孃の事業に同情を表するものは、曾見えざるもの丶中に、見ゆるものを交へ用ゆべきを勸告せしかども、獨りレヰー頑乎として動かず、曰く、キルベルト孃の商會の事務、一切盲人を以てして足る。他の助力を要せずと、斯くして久しきに堪へしかば、成功は遂に彼等のものなりしなり。

然して又レヰーの勇氣と精神は無限なりき。渠は佛國に於ける英國向の籃の製造所を見舞ふべく、同じく盲目なる妻を率ひて、ドーバーを渡りてカレイに上陸し佛語を解せず、目的の地も記せず、單に英國向の籃の製造所と云ふばかりの知識を以て、佛國八十九區を捜索したるが、其熱心遂に渠等を尋ぬる處に導き、篤く製造者に待遇せられぬ。渠等夫妻、此處にて籃の製法を學ひ、歸り來りて渠及び孃の徒弟に其業を授け、其事業に一層の進歩を加へたり。

孃の不在の間、レヰーは孃に簡して、火、商會の隣に起りし時、盲人の徒弟等より、如何なる勇氣と膽力を以て、危難の面に立ち働らきしやを語り、盲者に新なる價値を見出したることを祝しぬ。

孃が事業は次第に成長し、時と共に進みて、遂に拔くべからざる盲人實業の基礎を、世界に樹立し終に盲人

の幸福を進むる目的を以て、一個の規律ある倶樂部を創立し、女皇陛下を保護者に戴き、ギルベルト孃その中の主動者たるに至りき。千八百八十五年彼は此の名譽ある地位にあつて、其獻身的生涯を終へたり。彼は幼時慣れなる盲見なりき。然して、彼の獻身的生涯は彼の盲目をして他の明目より勝りて高からしめたり。

吾亡友

柳子

梢に歌ふ蟬の音に　憶ひぞいつる往にし年
愛惜き友と二人りにて　樹蔭凉しき草の上に
睦みかたりつ或るは又　梢を染むる夕日影
暮るを待ちて橋の上に　流れに映つる月影を
掬びしこそのたのしさよ　床しき友は今ははや
あだし浮世をよそにして　あの世靜かに眠るなり
蟬の小川の催眠歌　聞きつゝ靜かに眠るなり
浮世の風の賴みなき　此世の愛の面影を
あつめてゑがくわが筆も　いつしか夢と消えうせぬ
風の晨も雨の夜も　手をひきあいつ睦みつゝ
遊びくらせし其折は　悲しき今の死別をば
知るよしもなく暮しにき　床しき友は今ははや
小島野邊なる草蔭に　夢安らけく眠るなり
遺友がたむけの一と雫　知らで靜かに眠るなり

文藝

菊のながめ（上）

恕哉

「親方萬望、耳人が色々と御厄介樣に預り居りました御恩は決して忘れりやァしまぬが……御醫者樣の仰しやるにやァ今度の病氣は到底覺束ないとの事でして……當人は寢ても起ても、親方に濟まないすまないとばかり云ひ續けて居ります、萬望親方御恩借のお金は唯今の所では、何とも致方もありませんけど……耳人が如何なりましても、必ず〳〵御恩は忘れはしませぬば、つまり冥途に行くものなら、安心させてや

りたいと存じますから、萬望われが一命のある內には、御恩は報ひ申さないでも、紀念の男の兒當年で丁度拾歳……親の志を繼がせて、是非御恩返しは致させ



ます……」とせきあへぬ涙に、心の底の眞實を切れ〲の言葉に顯はして、落つる涙呑み込み、濕み聲に行末の哀をうつして、懇に賴みけるは年頃二十七八と覺しく、容貌人並より勝れし女なれど、良人が長の病氣に窶れ果てゝか、色香褪め、身なりも自然と生活の困難を代表し居ぞ哀なれ「勘さんは內の仲間では、一番腕も利いて人間も正直で、的にして居た者だ、然し病氣では仕方がねえ、お前歸つたらナ、我の貸金などの事は、少も心配しなくたつて好から決して返して貰ふのなんのと思ふ樣な了見はねえ、安心するように、さう言つてくんねえ、よ、我もあれがそんなに六箇敷いようなら、鳥渡行つて見てえが、これから直ぐ濱まで行かにやァならねえから、歸りに是非立ち寄るから、宜くさう言ッてくんナ、これは餘りちつとですまねえが、我の志だから、他の事に費はない樣に、勘さんに何にか好きな物を食べさせてやつてくんねえ、そしてこれからちと急ぐから、歸りには是非見舞に寄るよ」と思ひ懸けなき親切の言葉をかけられて、如何にも親方の慈悲深きにしみ〲と感じ入り、助け神に出遭ひし心地して夢かと許りに、嬉し涙はせきあへず、咽び入りて鼻すゝるのみ、親方も其心情の哀れさに眼うるませ顏をそむけて、二人とも暫時は言葉もなかりけり「大恩ある親方に又々重ねての御手厚い御

志……帰つて病人に聞かせたら、なんと申しましやう、御恩借の大金も返へさないに、こんなに頂戴して、如何がと思ひますが、折角の御思召、帰つて親方の御親切を病人に聞かせて喜ばせましやう」「兎に角帰りには是非寄るから、何分にも大事にしてやんなせえ、我のとなどはそんなに、義理張らなくたッていゝから、心配しないように、能く〳〵介抱してくんな」「早く親方の御親切を良人に聞かせて喜ばせませう」と急ぎに急ぎて我が家へと飛ぶが如くに驅け込めば、息子の太一郎は甲斐〳〵しくも、藥罎提げて今や藥取りに行かんとする處、病人は其物音に眼を醒まして、その泣き腫らしたる眼元の如何にも憂ひじみたるに先づ心付き「どうだ親方は大層怒つては居なかつたか、お前が出てからうつゝの様に寢入つたようで、何にか物にうなされた心地で緣起の悪い夢許り見て居たよ」とさも心配らしく問ひ懸くれば、妻は親方の親切なる言葉の儘、委細物語りければ、病人は「ア、親切なる親方だ」と其惠まれし親切を包める紙を披き見れば、内には壹圓の紙幣二枚包みありたり、病人は驚き顔に「お夏これ見ねえ親方は何處まで親切なか知れねえな」と其親切に心の底まで𢌞ぐらるゝが如き心地して、兩人嬉し涙に暮にけり「屹度親方のこの御恩は忘れてはならねえぞ、何には兎もあれ明日瓊の帰りに寄つて呉れゝば、親方に一言禮を言ッてそれから、我の好な物を食べやうよ、それがいゝぢやァねえか、お夏」「さうしましやうよ」と相語らい居るうち息子の太一郎は藥罎提げて帰り來り「お醫者様は今日見舞つてやるとおつしやつたよ病人「太一鳥渡來な御前に能く言ふて置く事がある、あの親方にはお前も常々聞いている通り、大金をお借り申してあるので、阿母が今其断りに行きたらね、何にか好きな物を買つて食べねえと、この貳兩のお金を下すつたんだ、今兩人で親方の親切を欣んで、泣い

て居た處だ、お前成長なつても屹度この親方の御恩は忘れてはならねえぞ」と又ゝ三人頭を揃えて咽び入りぬ。

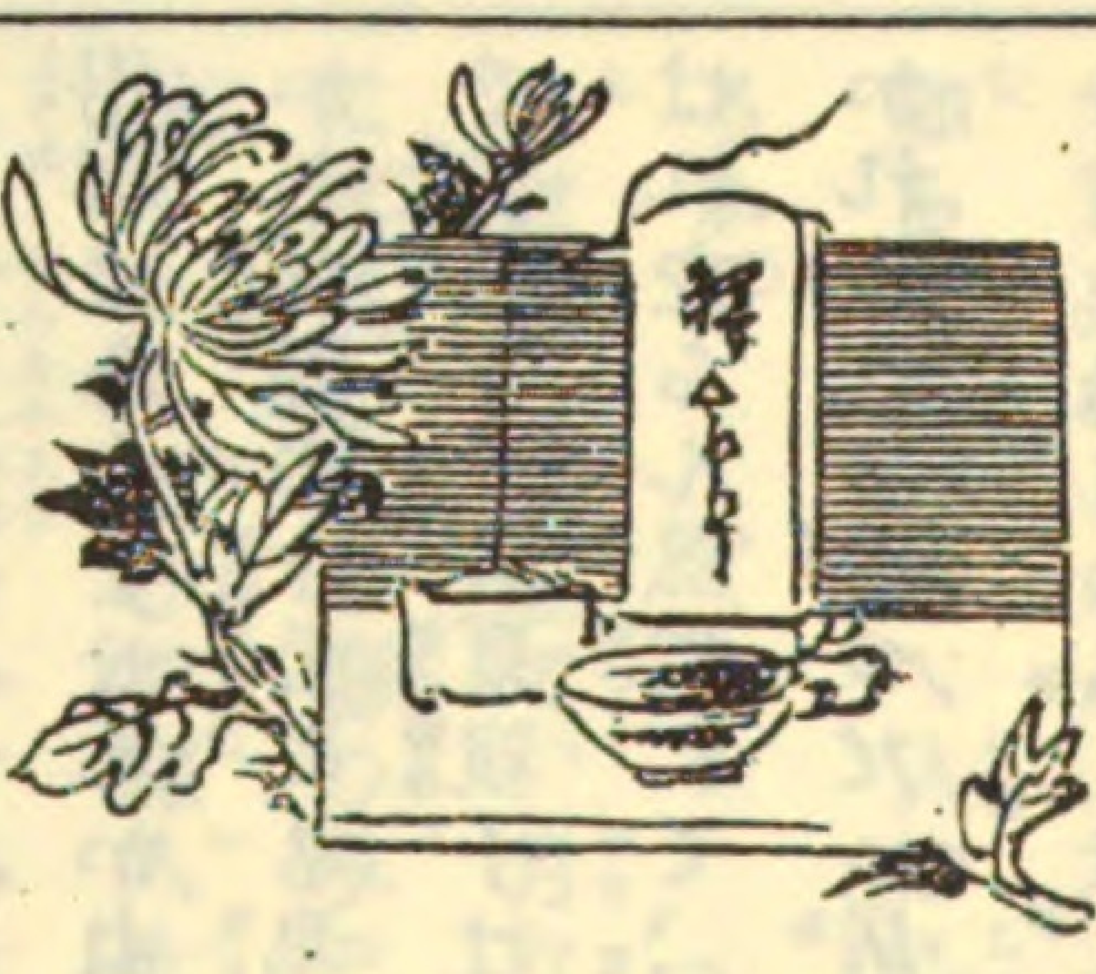
＊　＊　＊　＊　＊　＊

豐かならぬ職人渡世の一家、何條多くの貯蓄のあるべき、お夏は良人が去年の末つ方朔風凜として膚身を刺す寒さをも厭はで、仕事大事と働き居りしが、ふと風邪の氣味にかゝり、差したる事とも思はで、歳の暮などか一時たりとも休まるべきと、我慢強く働き詰めしが原因となりて、遂に肺に風を引き込み、純然たる肺病となりてよりは、看病の傍ら魂限知己々々の洗濯物など引き請けて、やう〳〵に細き烟を立て居たりしが、何分にも永の病氣、次第に其病勢も重る許り、病人に手の離されぬ身となりてよりは、少許づゝの米代も儲かる手段なく、多くもあらぬ衣類なども大抵曲げ盡して今は早や日用家道具にまで、手を附けねばならぬ有樣、されど良人の仕事道具のみは、病人に氣を落させまじとて殘し置くがやう〳〵位なりき、されど貞實なるお夏は、其苦しさを少しも病人に知らしめぬ樣にと、彼れ是れとやり操りを爲して、明日の日の計られぬ病人に、毫も氣の苦勞をばさせまじと、懇ろに介抱に手を盡し、出來得る限りは、その好むに任せて買ひ與へなど、一として病人に心を置かしめざりしぞ特勝なれ。

中

「勘さんの工合は如何」と入り來るは大恩ある親方の半六なり「どうも滾で用事が多くつて少し歸りが遲くなつた、勘さんは如何だねえ」と病人の顏を一刻も早うと心急がれて入り來る、妻子は病人の床の傍に悄々と打伏し、如何にも其樣子の變なりしかば「如何したんだ」と其傍に坐りて急に靜かの聲で問ひ懸くれば、お夏はやう〳〵に頭を擡げて、すゝり泣きつゝ「い、い

ろ〳〵と御親切様に預りましたが……と、到頭唯今呼吸を引き取つた所で……」と半六は吃驚「それは殘念、それは」と病人の枕元近くすり寄り「勘さん勘さん」と其額に手を當て、右手を引き寄せて瞳を験すれば、未だ全く躰温は去り斷らず「ア、殘念だ、勘さんなぜ待たなかつたんだねえ、用事が多くつて歸りが少し遅くなつた爲めに、ア、殘念だ〳〵」お夏は涙の痕淋しさうに押拭ひ「お、親方に一度御目に懸つて、い、一言御禮を言ふて死にたいと申して……」とわつと泣き出しぬ、半六も顔をそむけて少時は悄然と何にか考へ居たる様子なりしが、又々病人の手を取り「もう全く温氣が去つた、ア、仕舞ッた」と始終に其傍に俯伏したる息子太一郎の頭を撫でつ丶「お前は御苦勞でも鳥渡近所迄行つてきて」と皮財嚢を取り出し二十錢銀貨を出し「これで線香を買つて來ての、それから我が言つたと云つてあの線香屋の向の吉公を呼んで來てくんナ……大急ぎて」太一郎は泣く〳〵流場に出で丶顔を洗ひ用向を整へんとて出で行けり、半六は泣き咽びて五官も爲めに其感覺を失へるが如きお夏に向ひ「壽命がなくつて死んだなら仕方もねえが幸い善い息子があるからそれを力に氣を落さないで、これから働かなくつちやあ如何ないせ、我も出來る丈は世話ァするからの、後の事はそんなに心配しねへでもい丶よ」と慰むる言葉に



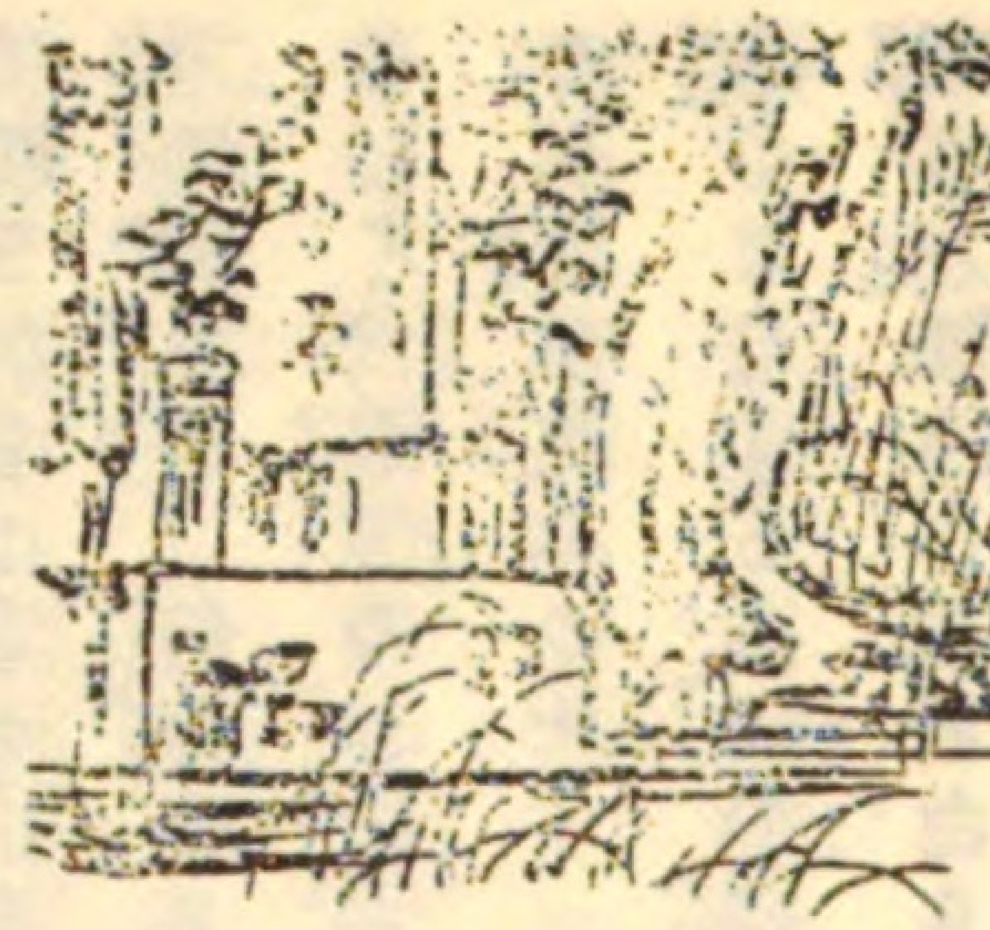
「何分宜しく、お願ひ申ます」「それぢやあ床を更へて寢させやうぢやあねえか、何にか白い切れはないか〳〵」と後方の始末を色々と心の中で算段する中太一郎は線香買つてきほ〳〵と歸り來り「お叔父さんはすぐ來るとさ」「よし〳〵御苦勞だつた」と立ちて死人の床を更へんと寢卷を脱がせて見れば、五躰

は眞に枯本の如く、痩せに痩せて、これで能く今日まで活て居たかと思はるゝ許りの躰軀、半六も思はずぽろりと落す涙の一二滴、床を換へさせんとて躰軀を抱き上けんとすれば、異樣の息氣は鼻を撲つて來るも親方半六はそれとも氣附かず、手軟しく抱き上ぐれば、こは不思議や、夜着の間よりばらりと落つる紙包、曩きに與へし貳圓の金、其儘にて出でしかば、如何にも合點行かず「お夏さんこれは如何したんだねえ」お夏は濕み聲にて「あなたがお出になつてから、お、お禮を申してから好きな物を食べさせえと言ふて……ア、殘念しました……」半六は其志の堅きに感じ、一入哀を催し「死ぬるまで斯く迄に……ア、惜い事をした……遲そかつたねえ……」と涙を呑んで「勘さん許えてくんナ遲そかつた……」と言ひつゝ床を更へて洗い張りの白木綿の切を覆ひ、鳥渡一服せんと煙管取り出だし左れ右れと始末方に思を廻らし居るうち、吉はあわたゞしく入り來り「親方到頭勘さんは善くなかつたそうだねえ」とお夏へも一應の挨拶を爲す、半六は吉に向ひ「お前早速だがお夏さんの實家へ鳥渡知らせに行つてくんねえ其序に區役所の屆の手續を聞いて來てくんねえ」吉は承知の躰にて「序でに何にか用事はありませんかねえ……エ、ツト丁度通り路だから仲間の才公にも鳥渡知らせて置かう」と急いで出で行けり、お夏親子は姬蔦の松を離れ、盲者の杖を奪はれたらん風情にて、何にもかも半六の指圖によりて、かれこれと手つだい居たりけり。

＊　＊　＊　＊　＊

我身獨りの秋にはあらねど、ちゞに物こそ悲しけれ、籬根に喞く蟲の音は物思ふ人の心にそゞろ涙の種を蒔き、金風颯と桐の葉を吹いて、庭前に落つるも心置かるゝ秋雨の空、木々は錦の糸仕度に忙はしく物の哀れは一入身にぞしむ、お夏は親方に重ね〴〵の恩護を受

け、よう／＼に野邊の送りを濟ませしが、何を言ふも杖とも柱とも頼む所夫に先き立たれ、はや口善悪なき人の口に上りて若き寡婦と呼ばれ、太一郎は近處のいたづら小供に唆られて孤兒と罵られ、この哀れむべき親子は、日々に朝霜踏み別けて程遠き淺草なる某寺の新墓に詣で丶香華を手向け、毎に袖をしぼりては家に歸り、未だ便り少なき太一郎をば膝下近く呼び寄せて、咽び入り内に、早や初七日とはなりにけり、今日は忌日に當れば朝早くより、例の如く淺草なるお寺へ參らんものと、樒を求め、線香をば整へて念佛など口吟みつ丶墓參を了へて歸り來りたる際しも、親方よりの使者なりとて入り來り、今日は新佛の初七日なれば、佛前に供へよとて蒸菓子の折詰に香典一包を添へて送り



越せり、お夏は然るべく厚く謝辭述べて歸へし、つら／＼思ふやう親方の深切は一通りの事にあらず、忝けなきと言ふも愚なり、さぞ亡き良人は冥途にて欣びつらむ、如何にして此御恩に酬ゆべきやそれに引き換へて實家のもの共は、知らせてより漸く悔みにとて一度音訪呉れしのみ、初七日の何日なるやもよそ吹く風と知らぬ顔、あ丶人の心には斯く迄に相違のあるものなるか。

夜は寂と深更て、月は濁たらん許りに冴へ渡り、庭前に落葉を砕く響のみぞする、お夏は亡き所夫の冥加を禱りつ丶無心に寐入りたる太一郎の枕元近く香を薫らして常夜燈のかすかなる光のもとに、悲しき幻の影を追ふて、今日は初七日、お夏が亡き人の名殘の夢をつ丶む心の中にも、僅かにつながれてあるは、獨り息子の太一郎、思つても思つても太一郎が今少し成長だつたら親方の御恩に酬ゆる仕方もあつたろうに、誠に親

方の親切と言ふものは、良人の病中より野邊の送りの入費、其後ちも色々と御助けを蒙りそれも良人がこの世に在るの日、四十兩許りも借りのある恩人普通大抵の事ではあらじ、その上太一郎をば取り立てゝやるとて明日からは宅へ引き取り下さる筈、アヽ有り難き親方の御思召、何分にも細く永く御恩を報ずるより外はなしと、追悼の心を手向けつゝ、果敢なき行末の事にのみ思ひ沈みぬ。

遠くきこゆる夜明の鐘はなき人が名殘の夢を破りて、東の方ほの〴〵と白らけ初めたり。

下

果敢なき浮世のなか、悲むべく哀むべきとの多かるが中にも、過ぎし哀れを吊ふほどはかなきとはあらじ、生者必滅會者常離は、人の世に免れ難きとは知りつゝも、倘ほ明らめ難きは誠に弱き人の情の免れざる所にぞある、久しく睦じく末かけて暮せし人の、早く此世を去りたる名殘の悲しさは、亡き人の紀念を見るにつけても、いや増しにける、お夏は亡き良人の夢を載せて、初七日をば泣く〳〵行末の哀をこめて吊ひけるが、悲みのうちにも僅かに賴りに思ふて、自ら慰め、やゝ心に力を添ゆる息子の太一郎は、親切なる親方の慈悲に預り弟子奉公の身となして行末を樂しみ、一日も早く成長せよかし、先き〴〵は好き嫁子迎へて、初孫をも見て樂しき一家をと果敢なき夢をのみ包つゝ、亡き良人の古着など洗濯するにつけても、悲しみはいや増して涙にくるゝ朝もあり、樽柹は亡き良人が、此世に居ませしをりの好物ぞと心付きては賃働の幾分を割きて佛前に手向けつゝ、幻の影を追ふて袖をしぼる夕もあり、時々親方の許を音訪れて賴める太一郎の顏を見が、何よりこの世の樂みの如くに見受られぬ、半六の親方もお夏を何くれとなく世話を盡しぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

其後如何なる事情のありしにや、亡き良人の三十五日の忌日に當りし夜、其墓側の柳の枝に縊れて死せし女あり、これ貞節なるお夏にてありき。

西洋女房氣質（中）

獨逸

自由は獨逸の深林より出で丶婦人を尊敬し細君を大切にする習慣も獨逸の森林より出でたり。羅馬帝國を踏みにぢりたる勇士も、神についで母妻を大切にしたるは、昔の歷史に明記せらる丶所なり。左れば尊敬は價値の影にて、此頃の獨逸の女房は、それ戰爭と云ふ時は、平氣に戰塲に馳せ出で丶手負の介抱すること中々今の赤十字看護婦も及ばぬ程にて、婦德を守り、勇氣を尊び、一言にして敗北軍の勢を振り立たす程の女もありけり。中世時代とても同樣にて、西曆紀元千百何年の頃に當り、コンランド三世と申す英雄ウァイレスベルグの町を圍みてやう／＼の事にて攻落し、町の男子は頑固に抵抗したれば一同死罪申付くる女共は赦し遣はす間何にても大事の品を携へ勝手次第立ちのく可しと命ぜられけるに、女共は陸續町の口より出で來るを、如何なる大事の品や携へ來りしと見れば、女の背に負ひしは皆わが夫なりしと云ふ話あり。近來に到ては文明の餘波として、婦人の位置などにても聊か古昔と異なる所あれども、獨逸女房の家を吾帝國として臺所を奇麗に治むることグラッドストーンの大英帝國の臺所預る如く、夫に對し子女に對し信實にして愛深く、身を献げて顧みず、質朴にして重厚なるは、獨逸當代の皇后陛下アウグスト―、ヴィクトリア陛下乃至昨年末に死去されし故ビスマアク夫人より車夫馬丁の女房に到るまで、皆一貫して異ならざる所也。現に今の皇后陛下も、皇帝及皇子皇女の衣服の整理料理の世話シャツの釦鈕股引のつくろひ等、必ず手づから

して人手を假られぬは、曾て本誌に「日耳曼皇后」と題して述べたる一篇を讀まれし方は已に知らるゝ所なる可し。

然れば日耳曼女房の目ざす所は、家第一、夫第一、子供第一也、然らば獨逸の婦人は全く國事に無關係かと云ふに、平生は左もなき樣なれども、いざ事と云ふ場合には婦人の氣焔燃へぬ事なし。奈破烈翁が大兵を提げて亂入したる時、憤然として國の獨立を憂へたる勇婦は、今帝の曾祖母たる當時歐洲隨一の美人ルイガ后のみならず、町あれば村あれば小村あれば小さきルイザ后充滿し、小さきヂヤンヌダアク群集せり。千八百四十八九年自由の大運動起りし時、志士を匿ひ牢屋に入り陰に陽に自由運動を助けたるもの幾何なるを知ず。婦人勢力壓倒家婦人干渉大嫌家の元祖たるビスマアク公此程演説して云はれけるは、五十年前日耳曼の婦人は國家の事に一向頓着せざりしか、近頃大分よくなり來れりと。公もまた悟られしか。さりとてはまた以上の例を忘却せしと見へたり。

演壇に滔々女權論を吐くのいかつき女とならずして、良家妻となり、幸福なる家を築きて樂んで兒女を養育し、其と同時に男女性の相異の容す限り國の爲め世の爲め盡さんずる女こそ、獨逸の理想的女房なれ。

北方の寒半島

子供六人、大きなる家内、客の馳走、日々の務、男ならば逆上して癇癪も起す可き面倒さを、細き肩一つに舁ぎのせて、朝より夕迄、人に向つて苦き顔一とつせず、報を求めず、親切にやさしく、事は雨の如く湧けども急がず亂れずまた休まず、眼を家の八方に注ぎて聊も隈なく、朝七時窓の障子の外猶暗ふして吹きつけられし雪のみ白き頃、ランプともして子供に朝飯食はせあつき茶をのませ、書物其他取り揃へて、暖かき外套に一々子供を包み、一々キツスして學校に出し

やり、然る後夫の朝飯の用意して、入費多端の苦情にも怡々として耳傾け、夫の機嫌とり、甲太郎が學校の試驗點の少なき乙次郎が行儀の惡きお丙が衣裳破りし事まで懇ろに夫に言譯し、一語一言温情香り、一擧一動優にやさしく、一聲一調和らかにして人を慰め、生きて名は一里の外に出でず、死して記臆は兒孫の腦中に神聖に殘るのみなれども、眞に家妻の好摸範たる、是れ瑞典那威の理想的細君なりし。

然るに今や所謂文明の恩澤は此處にも及んで、夜間男子と伴ひて平氣に淋しき街を歩し、革嚢を背にして大道狹しと自轉車を走らし、男子の來り請ふを待たずして、進んで男子を取捨する底の婦人も大分多くなりぬ。

かき暮しものぞ悲しき神無月
ながむる空にうち時雨つゝ



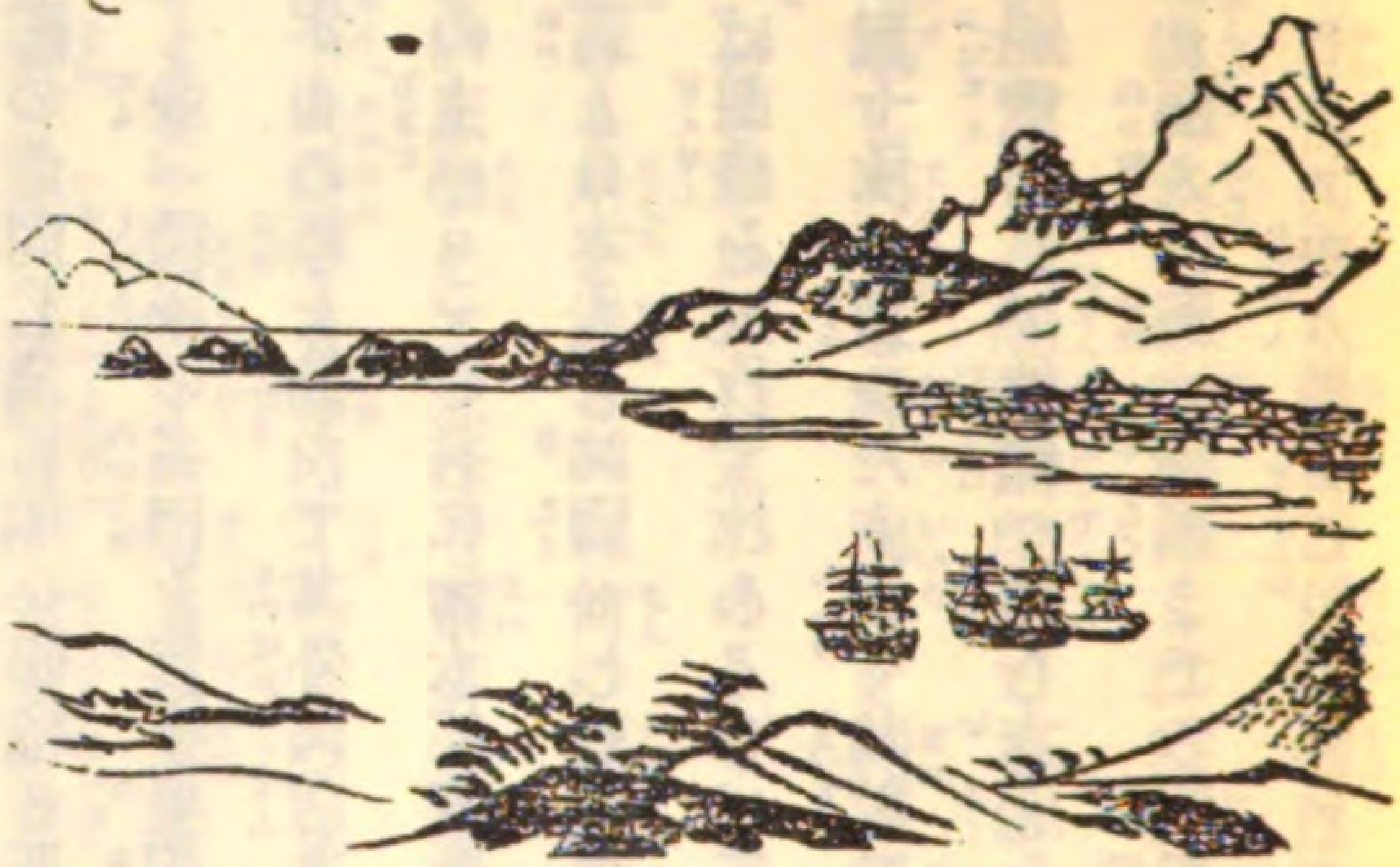
談叢

初太郎の漂流譚（三）

ラッパスの船頭にペロンと云ふ者あり兼てサンホセへは時々來りミゲリチヨウサと親しく往來し初太郎をも能見しり居たりけるが十月の初め頃初太郎ペロンの旅宿へふと往ければペロン初太郎に向ひ其方日本へ歸國の志あるにやと問初太郎老たる父母ある故舊里を思ふの情暫くも忘れがたしと答ふペロンの曰然らば我善きに計ふべしミゲリチヨウサは其方を養子にせんとの志ある故斯の如く寵愛いたすなりさかありては歸國の期有べからず我常にマサトランへも船にて往返するにより彼地の案内を委しく知れり紅毛船折〳〵彼地へ來ることあり此頃も一艘來り居る由風の便りに聞り紅

毛は日本へも通商するものなれば我往て其蘭船に賴みなば歸國せんこと安かるべし先善助と一所に相談わつて然るべしとてベロンより使を以てラッパスへ書翰を送り善助が家主へ達し其旨を申遣し置其後ベロンが船に善助をのせてサンポセへ伴ひ來りけり惣助伊之助利三郞等も家主と共にとくより歸り居たりし故に九人集りて評議し誰かベロンとゝもにマサトランへ渡り事を謀らんと云ければ各申す樣善助初太郞の兩人は別して愛せられし故言語なども餘程心得るべし七人の者は日々産業につかはるゝ間言語をも知ること少し餘程の海路大義なれども兩人渡りて宜敷取計ひ給はれと辭を揃へて申ければ兩人承知して初太郞は善助を家主の宅に伴ひ歸り家内の者へ對しマサトランへ用事ありて往たきよしを何となく噺しければミゲリチヨウサの妻子いかなる事にて行やと問ふ初太郞彼地の樣子をも見たく又は家主に逢たきよしを答ける故妻子も留ること能はずマサトランは繁華の地なれば見苦しからぬ樣とて三日計り前より新しき衣服を數々製し且朝夕の食事にも種々の馳走をなす善助も同じ家に逗留して有ける十月廿八九日頃ベロンの船出帆のよし告來れば家内の母子に少しは樣子を推したる躰にてもしや歸らざるとも有んかと名殘をおしみ初太郞が手を取抱きしめて歎き別れけり凡此地にては男女老少貴賤の分ちなく深く睦じき人々に遠く別るゝ節は互に手を取合抱き合て別るゝことなり扨ミゲリチヨウサの子は馬に乘り又七人の者も一所に濱邊まで來り見送り別れけり初太郞善助の兩人はベロンの船に乘り見る事凡四百石積ばかりにて帆柱は二本乘組は七人なり即日出帆してサンホセより卯辰の方へ向ひ航行せしが天氣宜しく風强かりければ五日目にマサトランへ着しけれども折節阿蘭陀船來り合さゞりければベロンと同道にて其處の領主ホロテルといふ人の家にいたり便船にのりて歸國いたし度よしを

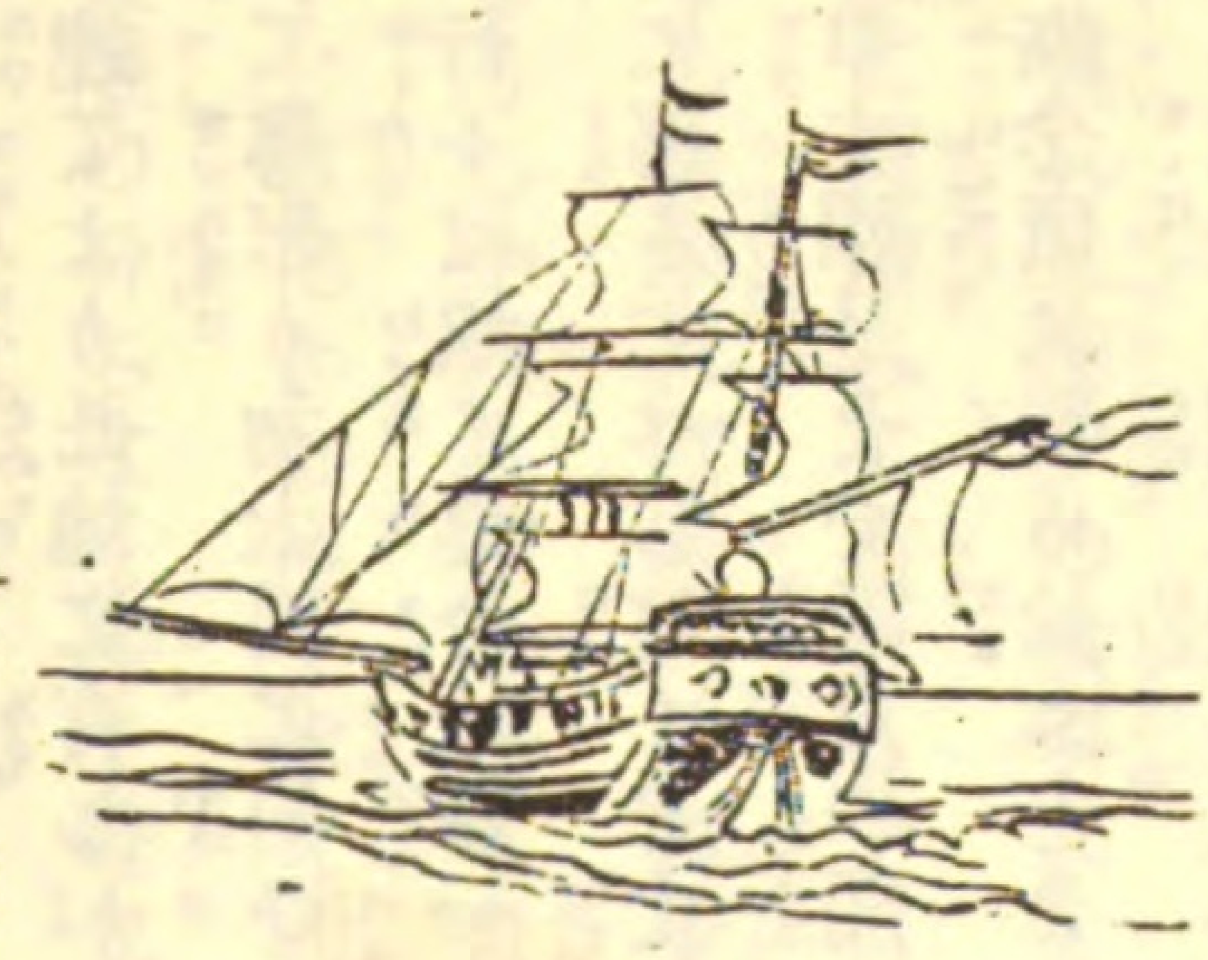
頼みける彼人申様北亜墨利加の内にも折節は唐土へ便宜も有べし先聞合せ見るべしと有けるが其後程なく彼人の所より幸四五日の内に唐土へ出帆の船ありとのこと知らせ來りければ兩人ペロンに向ひサンホセに殘れる七人の者は我等よりは艱苦も多し何とぞ一所に連歸りたしと云ければペロンがいはく此地より唐土へ便宜ある事一年に一度か二年に一度なり此船に乘後れてはいつか歸らん期を知りがたく其上海上四百里もあるサンホセへ七人の者を迎ひに往かば往返の間も數十日かゝるべく彼船いかでむなしく待て有べき



マサトラン港

や誠に得がたき幸の便船なれば歸國の志有らば早々に乘渡るべし七人と同船するとはとても叶ふまじと有ければ兩人談し合て云やう先我々計にても恙なく歸國して皆々の無事を告げなば舊里の人も喜ぶべし少しの義理をたてゝ此便船におくれては九人ともにむなしく此國に朽果んともはかりがたしと心を決し然らば先我々兩人のみ渡海すべしと念頃に頼けるペロン承知して初太郎善助をいたはりて此地にとゞめさまざまに世話いたし問屋の如き家に止宿いたさせけりかくする所へサンホセの家主ミゲリチョウサ先達てより此地に有しが此ことを聞つけたりと見へて頓て尋來り初太郎に向ひ其方歸國せすとも我家にあらば行々は娘と妻合せ銀一萬枚も遣し商賣をさせ一生安樂に暮さすべし何とぞ止まるまじきやと言しかば初太郎申す樣是まで數月の間の御高恩は蒼海よりも深く今又斯念頃に留め給ふとまことに有がたくは候得ども老たる父母を國に殘したれ

ば何卒歸りて養ひたく存じ御心に背き候也とて只ひれふして歎きけるペロンも側に在ていろ〳〵と詞を添へ歸國させ給へとすゝめしかばミゲリチヨウサ漸に納得し乘船の前になりては互に手をとり抱合て名殘を惜み別れけり凡此マサトランの地人家七百許家のありさま土藏造りに赤き瓦を葺き多分二階三階の造りなり軒は一町の間同じ樣に揃ひ町幅も廣く酒店には硝子の壜を多く並べ種々の名酒を賣り呉服店には羅紗羽毛氈西洋布本布の類を飾たて其外肉店なども甚だ多し此所の問屋の主ペロンと共に初太郎善助兩人を引つれ此地大家を巡り日本人を歸國せしむるの由を述て合力を賴みければ銀錢を五枚十枚あるひは二三十枚拔群の豪家にては五十枚も貰ひたり却て其數二百六十枚ありし內百枚を船賃として彼船へ渡し衣服をも少々調へ殘り百四十枚を兩人に與へ歸國までの雜費にすべしとて三日目にはペロン兩人に暇乞してサンホセに歸るなれば其時兩人より七太郎をはじめ七人の輩のことを呉〳〵とたのみければペロン申樣一時には雜用多くかゝりて叶ひかたし便船のあることに二人三人ッヽ追々に送り返すべしと心よくうけ合ひ始の船にてサンホセへ歸りけるかのミゲリチヨウサが初太郎を子のごとく愛せし恩義も忘れかたけれど又ペロンが兩人を故郷へ歸さんとてさま〴〵に世話せしも信實あるしかた也いつれ神佛の加護にてかゝる善心の人々にめぐり逢たるなるべしされば是より萬里の波濤を凌ぎ日本へ歸らんことも心安かるべしと賴もしくぞ思ひけるかくてマサトランに逗留する事五日壬寅十一月上旬彼便船に乘てマサトランを出帆し西の方に向ひ航りけり此船長さ十七間帆柱貳本帆數十餘り孫帆三ッかゝる乘組九人皆亞墨利加人なり唐



土へ買物に行く船なる故荷物はなく銀斗りを積たるなり順風に多くの帆をあくれば其船の速なる事言語に及びかたし又船頭副船頭ともいふべき者常にともに事を相議し天文を考へ海路を測り船の遲速をためすこと掌をさすかとししかのみならず幾日の何時には何方に磯ある所を通るべし何の刻は何れの方に山を見るべしといふ事を二三日も前より知る幾千里の道を走りても湊へ入船する時は丁とよろしき所へ少しも違はず乘入るゝなり又種々の道具眼鏡などにて日輪を望み度數を測り今は此船何十何度何分の所にありといふとをつまびらかに知るよしなり船中の人初太郎等に申樣唐土日本の船は山を見失ふ時は盲に同じ我等が船にては晝は日を山とし夜は星を山とす故に萬里の海上に浮べども日と星をさへ見失はざれば泰然として恐るゝ事なし若數日雨ふりて日と星を見ざる時甚心を勞するのみ又洋中にていかなる風波ありても恐ることなけれ共唯陸近き所にて磯に觸れんとを恐るゝとぞかたりける既に其年も暮れて癸卯正月となり洋中にて春を迎ふ漸々唐土近くなれば海水の色濁れり其濁れる所より餘程沖にも唐土の漁船出でおり地方を離るゝこと數十里なる故常に通ひ船ありて米薪水杯を送るよしなりマサトランを出しより凡七十日にして唐土廣東の湊口澳門と云所に着す 外國にてはマカチと云

高山彥九郎の談話

敬亭生

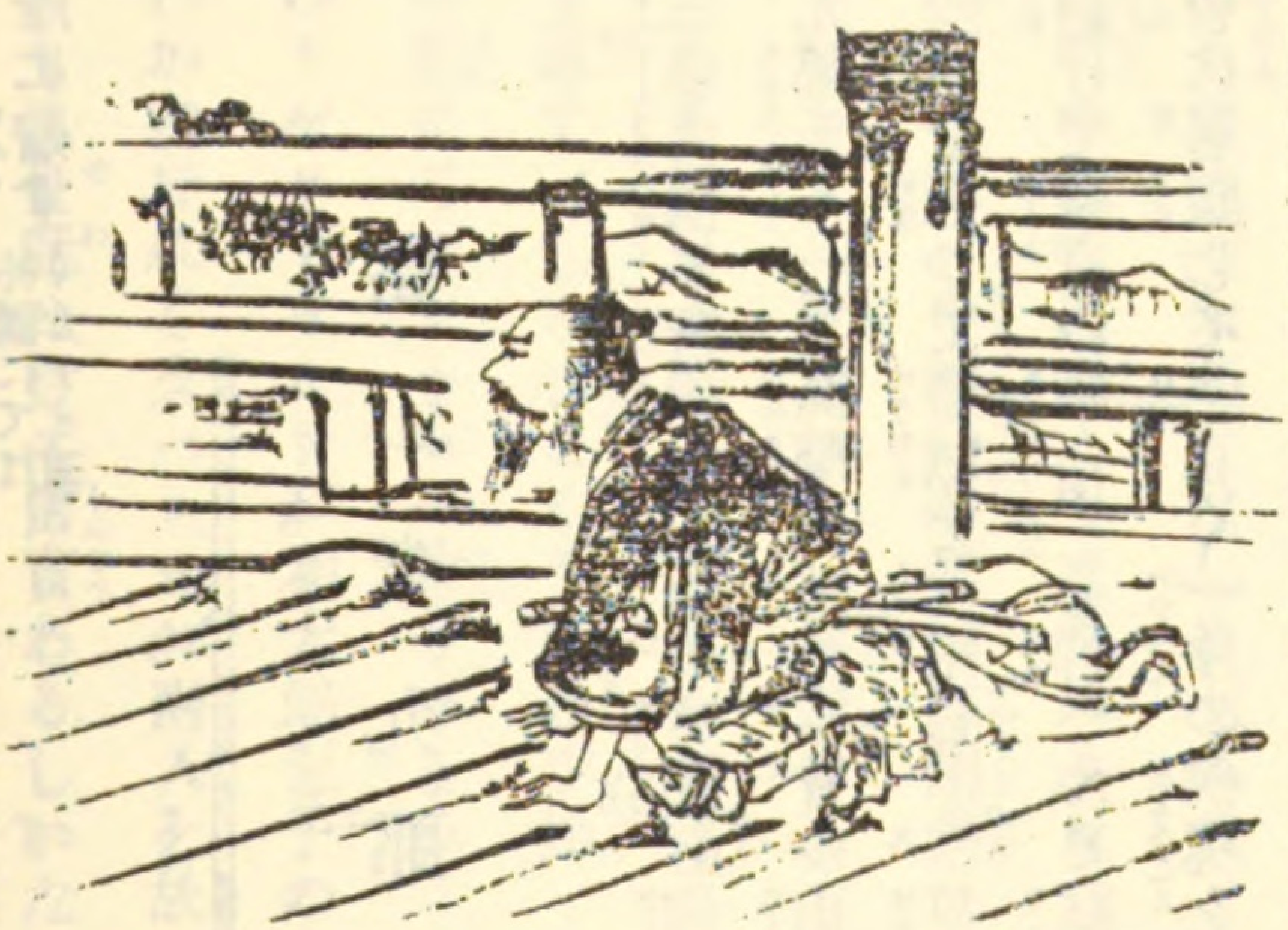
三條大橋に拜伏して遙に宮闕を仰ぎ「草莽の臣高山彥九郎云々」と高聲に呼び木曾の山中に三尺三寸の大刀の欛を握つて盜賊を叱咤し、江戸城中に中山大納言を助けて幕府の强項を抑へんと試み、果ては西海の客舍に屠腹して空しく一片の俠魂をとゞめたる奇男子高

山彦九郎正之は、まことに天性美しき質にて、感情強く、孝悌の心がけ珍らしき男なりけり。老母の卒去に哀傷して三年の喪を爲さんとし、親の鎚打ちし者あるを聞いて涕泣其人を訪ふて孝經一部を贈りしなど、如何に其情の篤かりしを見る可からずや。然れば彦九郎が三尺の劍七寸の鞋、六十餘州を遊歷して、風を觀俗を察し、形勢を考へ、人物を訪ふや、必らず到る處の村町毎に、今昔の孝子の跡を尋ね問ひける。

此頃家の舊記を何くれと見るに、曾祖父の記し置かれし高山彦九郎の談話なり。思ふに是れ高山が其末年

　薩摩人いかにやいかに苅萱の
　關も鎖さぬ御代と知らすや

の一首に關吏の心を解ひて薩摩に入るの途、肥南を過ぎし時の事にかゝる。話は極めて單簡、文は甚だ雅ならずと雖ども、猶以て高山彦九郎の遺風を想見するに足る可し。



上野の國新田の鄕に假住居の隱士高山彦九郎正之と申人の咄に孝子の事を申て行所必忠孝の跡家に參る。(余高山に向ひ)孝より先なるはなしと云聖の教もある事にて、御尋申も愚かな事には候得共、先生程懇ろに此田舍の過去の孝子を御尋あるは是なからん、と(二字不明)道すがら咄しけるに(曾祖父高山と肥薩の境に近き矢筈山に上るの道歟)

(高山曰く)不孝の咎、現に見聞して天罰の速なるを知れり。則新田の里に五郎兵衛と申て、貧しき百

性有、天性馬鹿らしきものにて才覺手術も無之候得共、兩親に其身丈の事仕る事、外の事に引替、孝心あげてかぞへかたし。然處其親のいへらく、五郎兵衛は江戸へ奉公に出し度由申候得者、少も不苦とて直樣東都に出で、御旗本に有附、合羽籠の者に召仕ありし。或時登城の砌、美々しく行列にて、小路を被通候に、諸侯の屋敷より殿方と尋候節、五郎兵衛と答、主人の名を不申、主人を初、別而近習赤面して居中內、又御役はと尋る。是にも合羽籠と答ふ。通路の人々主人を笑ふ。不被得止事夫より暇出ありしに、又町奉行の宅に奉公あり附く。此所に而者、口の者に被召仕候。是も登城の砌、主人の召し玉ふ馬の口を取ながら小使をいたす。此所より尙暇有之、在所に歸候所、兩親年長、農業も不相成候事に而、彼の立小便どの日夜出精に而兩親喰快よく寒からずして果て、後迄厚く吊ひ、佛事もなしける。父母わかれ永くなりて後、一人居候に付、近隣申合、五郎兵衛に女房を持せける。無程光陰の經て、男子を生む。成長して、父の五郎兵衛に打替、利口才發なれ共、父の不省をうとんじ、生付の利口に誇り、父母をないがしろにし、ある時五郎兵衛を足に而ける。其砌直にキッチリと膝の鳴候儘又痛まず候處、五郎兵衛果て後、朝日の出玉へば彼膝痛み、終日聲を立涕くらしける。日西に入玉へば、足の痛直に常の通にて、家業も夜分に勤、母を養ひける。母果て後は、晝夜足痛み不大形、身終る迄、夜白泣暮らし。不便の事にてありけるとかや。父果て晝天罰のある、父天なれば也。夜憐み玉ふは、母なれば也。父母死して夜となく晝となくうづき強きは、不孝の其身におよべばなり。(下文不明)

簡短なる一場の茶のみ話、其敎訓のとり樣あまり手近

過ぎて因果應報の說教に類するを笑ふなかれ。一代の志士、一代の大俠、一代の奇男子、膽は斗の如く、心は朱よりも赤き德川時代の魯仲連、擲てば錚々として鳴る六尺の偉男子仲繩高山彦九郎正之が、赤子の如く百姓の如き正直質朴天眞爛熳なる性情は、野袴の股立高くとりて菅笠右手に提げ、三尺三寸の大刀の欛に左肩をやすめつゝ、小石まぢりの山坂路を田舎役人と打連れて歩みながら、つくりも飾りもなく話し出でたる一片の噂話にも明らかに見ゆるにあらずや。

車夫三次郎

山本萬歲

近着の米國、紐育「ヘラルド」は東洋漫遊新聞記者の日本旅行記を掲載し其始めに日本の人力車の事柄を永々しく記述し遂に其車夫を以て人間中の牛馬なりなどの失敬なる酷評をなしたる後更に記事は一轉して東京新橋の車夫三次郎なるものゝ身に就き、其性行履歷を錄し、而白く且つ有益なる一節に入り「敬すべき日本は却つて下層の裡にあり」と云はしむるに至る、今其一節を直に抄譯せん。

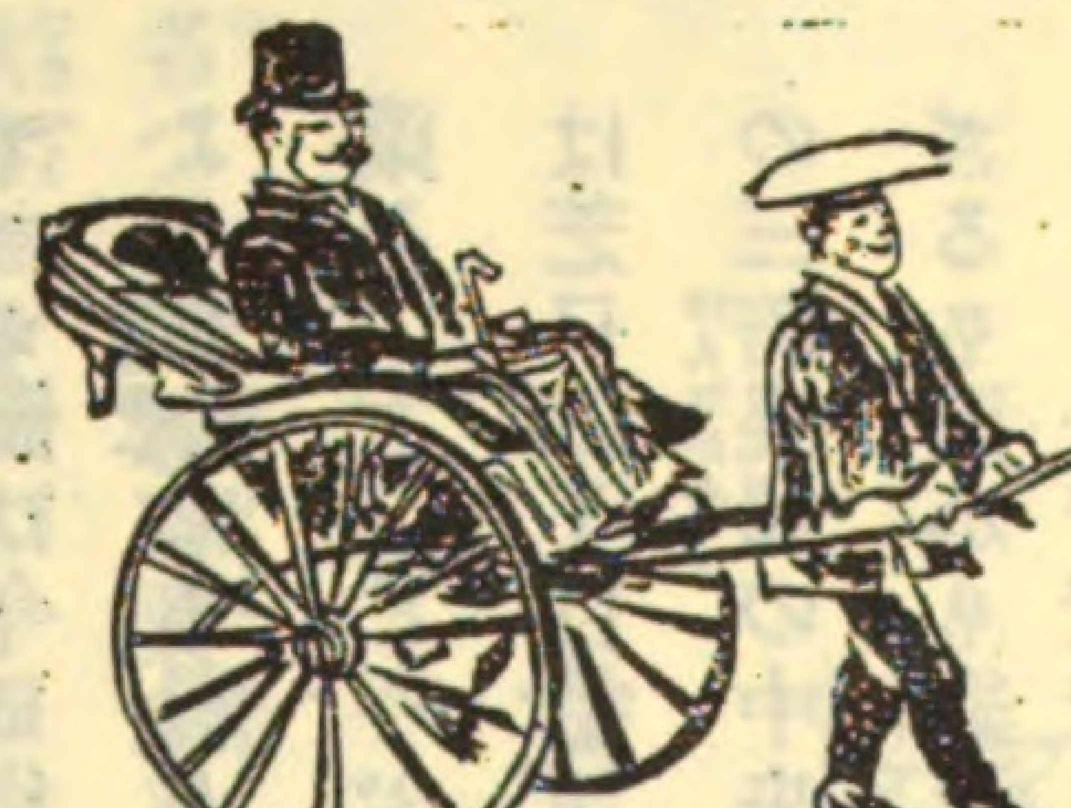


東京にて斯業を營む渾哥株の內に名高き三次郎なるものあり、渠は其車挽の外に案內者をも兼ねたるを以て其車に乘る旅行者は渠が多能なる心と力とに依り大に益するものあり、渠は關節に膨脹したる（フシ〳〵の頑剛になりたる爲め）が爲めに最早や「マーキュリー」の有翼輪は有せざれど（迅速馳聘すべからざる事）は能く英語を以て快談し且つ善く養育せられたる稚兒の如く懇篤叮嚀なり、渠嘗て予に（ヘラルド通信記者）謂へらく、僕齡已に五十を踰ゆ、楫棒を把つて暮すと

三十年亦人生に望なし只だ妻子を養ふて晩來、一盞の料を獲ば則ち足れりと、渠は士族の生れにして昔の連發「ピストル」の槌の如きチヨン髷を結ひ、予の知れるもの、内にて此當時の日本人を今日に見るは實に渠一人あるのみ、シドモア孃は其著書『日本に於ける人力車時代』に三次郎の事を記るして曰く、彼は新聞及世俗話しの泉源なり、昨日如何なる異邦人が來りしか、何人が晩餐を饗せしか、何茶亭に於て何軍人士官が妓を聘せしか、何省の某大官は何人を訪問し、何を購求し、何國公使より誰の迎として車を送りしかと云ふに至るまで備さに之を知悉せり、又客を乗せて道を走るに當り、此家は誰の住宅、彼處を來往するは誰貴紳、次の祭禮は何日、櫻の花時は何日、歌舞伎座、明治座、新富座、川上座、乃至蔦座、港座等は何を演じつゝあるやを能く語れり、渠は最く芝居通にして且つ神社佛閣の名勝古跡の案内者たるを以て兼ねて諸宗の教義を辯知し、夜會、園遊會へ客と出入し、貴人の庭池を知り、東京市中のあらゆる奇觀を説き得て漏らす事なし。



數年以前渠は一貴客の從僕として歐洲に隨行せり、然れども其歸るや意氣少しも驕慢の色なく復た車夫となりて生業を營めり、人の歐洲談を所望するものあるも渠は之を以て虚傳なりとなし大に嗤ひて一語をなさず、惟だ予に云ふ數年前一たび廣東に行き上海を見物せしとは髣髴として今尙ほ記するあるのみと、予は一日渠を寫眞店に伴へりき、渠は其多くに知られたるの故を以て予は之を新紙に肖像を掲げんが爲めなりしなり。」



ローガー氏の詩「ゲテルパ」の内に。モデナを見物せんと欲する旅客は必らず先づブレッキオ門に程近き宮殿に其の足を留めよと、予は東京見物をなす旅客に向ひても亦た言はんとす、新橋停車塲の西方の階段の上に立ち、先づ三次郎と呼べ、チョン髷を結ひたるもの應といらへば、其の旅客は必らず日本の首都中にて最とも怜悧にして又最も經驗に富める、信用すべき車夫を得む、予は特に之を貴女に推撰せむ、丌は渠は士風の禮を守り、都人の輕佻なく、叮嚀、温雅、好んで世俗を語り、往々また古事史を談ずる、皆な注意、周到、正直にして吾人の敬すべき元素を求ば其下層の間に會得しつゝあればなり、

譯者山本萬歳子申す予は昨年來渠の宅に止宿し能く渠の性行の淳樸を知り渠の智見の所を知り、其の廉潔なる、其俠風ある、其眞摯なる、其博愛なる、其居常清貧自若なる、其朝夕飲して而して亂せざる壯語なきも快談に富み、昔時に如何の懐感なきも其チョン髷は今日尚ほ依然たり渠は日本人に知らるゝより割合に外國人に知らる、渠は柴山を姓とし同僚渠を「三き」と呼ぶ通稱素と三吉なるが故なり渠が家は芝口三丁目拾四番地の細き路次を折り曲りたる中の三軒長屋の中央たり、所謂九尺二間の制規を越えざるも而かも樂天の妙趣を實踐躬行の上に解得せるなり、十餘人前の失意者を籠居せしむべき二階を有せり渠の第一の兒は年十八、東京秀英舍なる活版所に在つて渠の經濟を補ふて餘りあり第二の女子は紐織職修業として亦朝夕家にあらず渠は尚二兒を有せり、昨年次女を失ふも渠は前途此三箇の男兒の生長を待つものゝ如し渠は今や眞將來の多望なる丈け夫れ丈け貧乏を知足安



分の間に甘んぜり。
渠は英語の外佾佛、獨の語を少しく解せり渠は更らに實用に向つて露、伊、土、乃至羅甸と雖も渠の外語を音調の間に解釋し斷案して敢て或は誤らざるは其怜悧、否な寧ろ、其先天的に外語の義繹に巧みなるは蓋し何人も及ばざる所なるべし。

毎朝の健康くらべ



●「×さん大分お早う
×「ヤ、これはお早う
●「今朝は隨分寒がこたへます
×「ナニ寒いとがありますか、かうやツて毎朝淡闇い時分から寢室を離れて此通り井戸側で冷水摩擦をしますさ、ホラ御覽の通り、此腕から蒸氣がホヤ／＼立つて居ます、どうです君も一つおやんなさい、何よりの建康策ですぜ
●「君もさうだが、僕のも御覽なさい、毎朝洗足で厚霜を踏んで、箒を取つて家の周圍などを掃くさ、身體がカツ／＼してちつとも寒氣を覺へなく、先づ第一の運動になります、それにこうやつて置くとどのくらい下女なんかの手助になりますから、また毎朝此仕事をして序に木鋏刀でも持つたら、植木屋を入れずともよし、健康、經濟一擧兩得です、一つやつて御覽なさい



×「君も私の健康策をおやんなさい
●「君も×「君も●「君も×●「アハハハハ

家政

子女教育資金

すみれ野

名づけて教育資金といふ、されど必らずしも其使途は教育に資するものとのみ限らざるなり。或は嫁娶の資となすも可なり、或は其際持參金となして良人不時の

需に應ずるの資となすも可也、又或は興業の資となすも可也。要は唯子女成人の後、有用の費途に供する資となすにある耳。

親として權理あるは、究意其子女を啓發養育するに在り。倘し親にして其子女を啓發養育すると勿くむは、親として殆んど親の權理なき者といふも可也。故に親の任務は主として其子女を敎育するに在り。是れ子女の敎育資金を備ふるの要ある所以也。

子女敎育資金とは、その名既に之を示すが如く、子女が相當の敎育を受けむとする時、或は婚姻せむとする時、又或は成年に到り相當の事業を營まむとする時に要する資金に充てむが爲に、親たる者が是を取扱ふ一會社と契約をなし、毎月、或は毎半年、毎年等契約に遵ひ、期定の年限間一定の掛金を爲し、之を其會社に依托預入となし、年限滿る時、拂戻を請求し、以て其用を濟すに供する者たり。換言すれば若干年間一定の掛金となし、滿期の後百圓、二百圓或は五百圓といへるが如き豫定の金額を受取りて、子女有用の資に供するに在り。

五百圓乃至千圓と纒まりたる金圓を、一朝にして調達せむとは、多少富裕なる者と雖、時に或はなし難きの恐なきにあらず。然れども一ヶ月或は半年、乃至一年毎に、一圓或は五圓、乃至十圓の蓄積となすとの貧者と雖、よく爲し得べからざるの事にはあらず。子女敎育資金の積立法は此の貧者と雖、よく爲し得べきをなして、富者と雖よく爲し得べからざるを併せて爲すの法たり。他言にて表はせば少許づゝ蓄積して一時に巨額を爲るの法たり。故に勿論貧者の爲には必要也。去れど又併せて富者の爲にも必要たる也。

人或は富者は常に巨萬の財貨を有すれば、格別這般の備あるの要なしといふ。富者は永代富者の運命を有する者とせば或は此說も然らむ。去れど富者は必ずしも

永代富者たらず、貧富は綯へる繩の如しとかや、昨日金殿玉樓の裡夜光の杯に葡萄の美酒を漂はせたる分限長者も、明日街頭に殘肴冷肉を乞ふの零落者となるに至るを保す可からず。されば親たる者は富餘りあるの日も、常に貧にして足らざる時の心ならずしてなるべきやは。富者豈に敎育資を備ふるの要なからむや。縱し假りに此の如き假定の事實なきにもせよ、猶且つ其必要あり。蓋し粒々辛苦の餘になりしものほど消費するにも心配りぞ多かれ。富者の富のいつれか粒々辛苦の餘りになりし者ならざるはあらざれど、去れど有るに任せて取り出して資金とし供せむには、是を受くる子女も父兄が多年苦餘の蓄積になりしと心付かで、消費するも多くあるべけれ。然れども之を供する時倘し云々の法よりて、長日月の間粒々辛苦して蓄積したるとを語れば、子女もいとゞ自ら難有さの覺へられて其業も勵み、其心にも協ふべき樣懈らざるべきなり。

去れば貧者のみかは、富者亦要ありと謂ふ可し。然らば敎育資金は如何にして如何なる處に於て取扱はるべきか。

こは保險の一種に當たる所あるより、多く保險會社に於て取扱はるゝなり。大概の保險會社にては皆此取扱をなすなり。其方法には種々あるめれど茲には最も普通にして、最も容易なる方法を紹介すべし。即ち明治生命保險株式會社は、十萬圓の資金を以て明治十四年に業を起し、明治二十七年には八十八萬八千三百五十八圓三十錢六厘の積立金を有する迄に進歩し、我國保險會社中最も古く、最も確實にして後立保險會社の多く取りて摸範となしたるものなれば、今は同社の規則方法を案内するの適當なるを信ずるを以て、さに記せん。

同會社の規則中に曰く、

子女敎育資は子女の敎育又は婚姻等の費用に供する

積金にして豫定の年齢に至り契約の金高を渡す者なり若し中途にして子女死去するか又は掛金の拂ひ續きを爲すと能はざる時は拂ひ込みたる元金を拂ひ戻すべし

と而して其拂金は子女十四歳に至りし時受取るべきものと、十八歳に至りて受取るべきものとの二に分たる。

その十四歳にして受取るべきもの、資金百圓に付ての掛金は左の如し。

年齢	年度掛數	年掛	半年掛	三ヶ月掛	月掛
一	一三	五、〇〇円	二、五六三	一、三〇二	、四四〇
二	一二	五、五九	二、八六五	一、四五五	、四九一
三	一一	六、三〇	三、二二九	一、六四〇	、五九四
四	一〇	七、一六	三、六七〇	一、八六四	、六二九
五	九	八、二一	四、二〇八	二、一三七	、七二二
六	八	九、九七	五、一一〇	二、五九五	、八七七
七	七	一一、七〇	五、九九六	三、〇四六	一、〇二九
八	六	一四、〇〇	七、一七五	三、六四四	一、二三一
九	五	一七、二四	八、八三六	四、四八三	一、五一六

一〇	四	二二、一〇	一一、三二六	五、七五三	一、九四三
一一	……	……	……	……	……
一二	……	……	……	……	……
一三	……	……	……	……	……
一四	……	滿期受取	……	……	……

その十八歳にして受取るべきもの、資金百圓に就ての掛金は左の如し。

年齢	年度掛數	年掛	半年掛	三ヶ月掛	月掛
一	一七	三、三四	一、七一二	、八六九	、二九四
二	一六	三、六八	一、八八六	、九五八	、三二四
三	一五	四、〇五	二、〇七六	一、〇五四	、三五六
四	一四	四、四九	二、三〇一	一、一六九	、三九五
五	一三	五、〇〇	二、五六三	一、三〇二	、四四〇
六	一二	五、九八	三、〇六五	一、五五七	、五二六
七	一一	六、七〇	三、四三四	一、七四四	、五八九
八	一〇	七、五七	三、八八〇	一、九七一	、六六六
九	九	八、六四	四、四二八	二、二四九	、七六〇
一〇	八	九、九七	五、一一〇	二、五六五	、八七七
一一	七	一一、七〇	五、九九六	三、〇四六	一、〇二九
一二	六	一四、〇〇	七、一七五	三、六四四	一、二三一

一三	五	一七、二四	八、八三六	四、四八八	一、五一六
一四	四	二二、一〇	一一、三二六	五、七五三	一、九四三
一五	……	……	……	……	……
一六	……	……	……	……	……
一七	……	……	……	……	……
一八	……	滿期受取	……	……	……

即ち年齢一歳の子女にして十四年に達せし時百圓の資金を受取らむと欲する時は、十三年間一年一回拂込の者は五圓づゝ、半年拂込の者は二圓五十六錢三厘づゝ、毎三ヶ月、或は毎月拂込の者は同じく右の表により、社會と契約の上拂込むべきなり。さすれば十四年に達せる曉には坐して百圓の資金を得べき也、但しこは百圓に對する率なれば五百圓の時は是に五倍、一千圓の時は是に十倍の掛金となせば得らるゝの都合也。

此局に當りて經驗ありし者の言に曰く、生命保險金を受取に來る者は滅容ありて、面會するも氣の毒なる心地すれど、敎育資金の受取に來る人の面會には毎に愉怡禁すべからざるの色あるを觀て、何となく心地爽快なるを覺ゆと。實にさこそあるなめれ。知らず世の父兄吾人と與に此の快情を掬するの心ありや否や。

但し注意すべきは契約すべき會社の撰擇にあり。若し基礎鞏固ならず、信用厚からざる會社と契約をなしたらむには、如何なる不都合の生ぜむも計られず、戒愼すべき也。

交際しにくき人

黄花

人の氣質は樣々にて、極くサッパリとして所謂人つきのよき人もあれば、言葉少なにどことなく打ちとけぬ交りにくき人もあり。明るきにつきて、陰氣なるを避くるは、まことに人情なるが、其陰氣な人つきの惡いと云ふにもまたさまざまありて、中には日がけの花の

色薄き如く境遇の爲めに然る者もあり、冬の畑の霜白き一ト重刎ねのくれば下は黒土隙かに麥の芽青々と見ふる樣に、表面はすげなくて内には限りなき眞實親切の情をもつ人もあり。されば心して人に對せざる時は、往々よき友を咫尺に失ひ、また親切を盡す可き機會を眼前に逃すことあり。

記者は曾て學校にありて某女史を識りぬ。女史は平生言少なに鬱とした顔色にて求めて人に交らむともせざれば、人は皆女史を疎ずるともなく遠かり居たり。唯、人は縮緬の羽織着て出で行く時にも、女史は毛繻子の羽織を着、人は先を爭ふて歸省する夏休にも、女史は獨り學校に留まりて歸らぬ事に、家の豊かならぬを知るのみなりき。後故ありて女史の一生をきゝしに涙落つる事のみなり。女史は中國の人、家貧しくして老父母あり、其を養はむ爲めに小學校敎員となりて務めしが、猶足る可くもあらねば、奮發して東京に出で勉強を積みて老父母を安らかに過させむと、強て父母の許を請ひ思を殘して東京に出で學校に入りぬ。朝々暮々故郷の父母は東京の天を望みて其女の卒業を待ち詫び、霜の朝、雨の夕、女史は故郷の老母の此寒さに、煩事洗濯手一つにせらるゝを思ひては、胸裂くるばかりの思ひをなしぬ。或夏休の事なりし、人は皆歸れるに、己は旅費も自由ならねば、獨り居殘りて、折しも服制の改革にて無用となりし粗末なる洋服をときて、奇麗に糊張し居たるを、同級の某何にしたまうと尋ねしに、女史は顔赤らめて、實は故ありて歸國せられず、待ち詫ぶる母に何か品物でも送らむと思へども、其も思ふに任せざれば、之を單衣に仕立てゝ送らむと思ひ侍るなりと、涙ぐみて答へぬ。斯くて女史は去年の春卒業して歸國し親子の喜限りなかりしに、夏に到り急病にて身まかり、老父母は亡骸に取りつきて泣きしと云ふ。傷ましい哉、思へば女史が常に眞面目

に言葉少なく浮かぬ色なりしも故あり。左る事のあるぞとは知る由もなく、久しく面を知りながら、疎ずるとにはあらねども、おのづから遠きまゝになし置きしこそ今更淺猿しき限りなれ。花の早く萎むは、腹を蝕ふ虫あればなり。されば言葉少なきは、約ね憂多きの致す所、沈鬱の顔色は毎に悲愴の歴史を語るものなり。尋ね見よ、搜り見よ、其皮を剝ぎて心に達し見よ、慰む可きの悲しめる靈魂、寳とす可き温かき心は、往々にして靑蒼たるすげなき顏の下に見出さるゝことある可し。

兩親と小供との愛（上）

しばのや

一、汝の兩親を尊び能く之に從へよ、兩親は汝に生活と食物と喜を與へしも汝は之に心配及憂苦を酬ひしのみなるぞ

二、兩親は汝の心が良好ならんとを祈り已に汝が幼にして此世の事を知らざるの前汝の爲めに未來の事をも處理せり

三、兩親に從順なれ兩親の心は汝の心とせよ兩親に愛を表すれば又神を愛するの心を生ず

四、衷心より父を愛し衷心より母を愛するの人は如何なる善事如何なる大事業をも爲し得るの力を有す

五、父と母に從順にあれ汝に良好なる事は兩親ほど能く知る者あらじ汝を賞し或は罰するも常に其賞も其罰も皆愛に因せざるはあらじ

六、汝は最早兩親の膝下にあらざるも之を尊敬し決して汝が厚き恩を之に負ふて忘却する勿れ、噫兩親は只汝の爲めに生活したれば汝も亦兩親の爲めに其恩を忘れずして生活せよ

七、父を尊べ父は汝の爲めには已に何回心配しつゝ夜を明せしぞ又汝が樂しく遊び戯れし間は幾回祈りしぞ汝の爲めに此世界に適當なる運命を造り與へんが爲めには幾回快樂をも顧みずして額に汗を流せしぞ

八、母を敬せよ母は汝を生むにも生命をも賭し又汝の見鑑に侍して愛と憂の涙を流せし幾回ぞ汝は此愛此涙に酬ゐんとするには何を以てすべきか母の晩年の爲めに汝が慈愛を以て孝を盡すに優るものはあらじ

九、汝は可愛らしき小兒か其の膝に在るを見よ汝も亦先きには其の如く援助なく母の膝にありて誰よりも最も多く深く愛されたり

十、小兒の傍に侍して之を遊ばせ或は蒼白なる頬にて小兒の病床に看護しつゝあるの母を見よ汝も亦曾て汝の母をして是と同一の樂みと是と同一の憂を嘗めしめしぞ

十一、噫汝は如何にして此深き恩惠に酬ゐんとするぞ

十二、父と母とを尊びて其老年に於て其養育人其朋友其守護人たれ老年の兩親には曾て汝が幼年の頃受けたるが如き愉快なる時間を附與して汝が曾て受けたるの心配を兩親の心中より除き去れ曾て兩親が汝の爲めに萬事を犧牲と爲せしが如く又兩親の爲めには汝は萬事を擧げて犧牲と爲せ

十三、汝の兩親を尊敬せよ其過失を發見するも之を隱匿せよ兩親は名譽を以て高年に達したる事なれば今汝は嚴格なる修身學者たると勿れ

十四、兩親に不完全と弱點あれば之を蔽へ汝が兩親の名譽は又汝の名譽なり兩親は曾て汝の幼年に於て惡戯を爲したるの時には涙を出しつゝも慈愛を以て汝を遇せり汝も亦今や其如くにすべし

十五、汝の兩親を尊敬せよ兩親の此世に在らざるの日

も能く信神なる紀念を以て之を尊べ其死後も名譽あるの生活を爲して之を敬せ噫汝は或は兩親の最終の心配、憂苦、喜、祈り、なりしやも知るべからず

內職案內

●麻裏草履底付　年中絶えずある仕事にて女の業としては先づ〳〵割の好き部なるべし、草履の甲と底とを付ける也、糸と竹の皮とは自分持にて十足に付、三錢（六寸物）、四錢（七寸物）、四錢五厘（八寸物）、一錢五厘（子供物）のいろ〳〵あり、大躰は一日に二十足から三十足までぐらゐは出來る主人持の女中などがお暇の出た後の夜業にするも多しと云ふ、問屋にて持運をして呉れる便利もあり

●同じく鼻緒作　是は白木綿の布幅を五本から十本ぐらゐまでに割つて鼻緒に拵へる也、賃錢は其の五本から十本までの數にて相違あり大躰五十足ぐらゐは出來る筈にて十錢から十五六錢までぐらゐは取る筈なり、針取の心得は入用の事なり店番をする女房さん達が手を遊ばせて居やうよりはとて爲る人も多しといふ、木挽町邊より本所邊は此の仕事さかんに行はるといふ

●團扇の骨削　竹を削りて團扇の骨を拵へるの故熟さぬものにはなか〳〵出來難たからん、尤も仕込みは冬季の方忙がしく堀江町、馬喰町等の各問屋より絶ず注文あり、上等百本に付き十錢內外中等同八錢、下等同五錢位ゐにて熟練に至れば一日上等品百本、中等百二三十本、下等百四五十本を拵へ上ぐれど仕上の精粗に依りて尙ほ賃錢に二三錢方の增減あるよしこの內職をする者は麻布芝四ッ谷區等の場末に多し

●乳付け金物　羽織の乳と紐との間を繫ぐ金物を拵へるなり、問屋より延の地金を請取り來たりて双方の端

を躰裁よく折込せるが仕事なり、これも素人には一寸と出來難けれど少し稽古して熟練に至れば一日二十掛位ゐは慥かなり、賃錢は十掛五六錢の間にて問屋は日本橋區橫山町邊に多し

青年健康學　これは津田仙氏が米國エー、ビー、バーマー氏の原著を譯したるものなり、先づ生理上より酒精、醱酵、煙草、鴉片等が如何に身体に害毒を及ぼすかを説明し、筋肉、骨節、消化、呼吸、血液、皮膚、躰温、五官の組織、作用及衛生を最も簡明に叙述したる青年必讀の書なり東京麻布本村町學農社發行定價五十錢

社交一斑

流行の栞

春夢

男女書生羽織

男物　第一は例の大島紬、第二は米琉、琉球平民的にては久留米絣、男子の書生羽織としては此三品にとゞめをさすが如し、兎に角絣大流行の世となりぬ、丈は普通の袷羽織よりも五分乃至一寸長き方流行すべし

女物　紋織お召第一等の位地に在り、次は米織の珍縞にして次は本場八丈若しくは八王子八丈（殊に妙齡の婦人に見受けらる）次は米琉球或は上州製產の琉球絣、其他は紡績及双子がすりなり

婦人合羽

婦人合羽は日一日流行の盛大に赴くやうなるが、今茲に流行を栞するものは、普通木綿製の合羽にならで男子の着する外套の地質にて製せしものなり、其柄は珍斜綾羅紗第一等の流行にして色は鼠、焦茶、花色、黒、媚茶、藍鼠、濃茶、等にして次は利久、濃肉、黒紺の珍綾羅紗とす、其他は黒無地、紺無地を着するものを見受れど、此色を用ゆるは重に或社會の婦女等なり、裏地は表の色と同樣なる無地甲斐絹に限れるが如し

お高祖頭巾

從來案内したる頭巾は大巾四尺を用ゐ、紐をもて耳にかくるやうに仕立てしものなれど、今冬の流行は少しく其趣を異にし大巾四尺五寸を取り耳紐を用ゐず其邊端を兩耳へはさみて冠る風俗とはなれり、其流行色は藍鼠、利久、鳩羽、べにかけ、藤色、千歳、梅ねづみ等（自家の紋及姓

名を記入せんがために種々の形にて石持に染拔あり）

繻絆の袖

男子の繻絆の袖は大巾又は半巾の無地縮緬を五尺用ゐるもの普通の好みとなり居たるが、昨今流行するものは大巾縮緬の邊端を更紗形又は格子などに染め出せしものに限るが如し地色は藍鼠、淡れづ、利久、淡鐵等にして鳩羽鼠、藤色の如きは藝妓等の嗜好に適す、價は三圓より四圓位なるよし

鬱金縮緬のしごき

可憐なる女兒の晴色のしごきは、これまで鹿の子縮緬か、淡桃色か、紅の縮緬に限りしが如き觀ありしが昨年より今冬にかけての流行なる鬱金縮緬に其位地を奪はれたるが如し吳服屋にても鬱金縮緬は餘り仕入れ來らざりけれど今年の如きは前年よりも幾倍の仕入を爲し、盛に賣行ありしと聞けり以て其流行の如何を察すべし

雜録

日本婦人の好摸範

十年以前縁切りし女の操を立てゝ他に嫁ず居るが其の夫たりしものゝ此度び征清の途に上るを聞きわざ／＼停車場に送り且つ廣島の客舍に書を寄せし其の眞情をはこぶ日本婦人の好摸範といふべし

一筆申上まいらせ候扨今更申上るも恥かしながら御前さまと私は親と親との許せし中に候ところ如何なるうき御縁なるか親類共に離別せられ何といひとくすべも未だおぼこ氣のさら／＼知ず緣無きとと思切十有餘年の其の間只の一度も打とけて御言葉もかけずくらし居り候處昨夏日清開戰につき御前さまにも御出京に相成り候處其際にわざ／＼御尋ね下され候由折惡敷私は製糸の留守にて御面會申さず實に殘念に思ひつゝけ居り候處ふしぎにも御尊父樣より姉承り私へ知せ吳候故未だ盡きぬ御縁と思へばいとゝ御なつかしきやら又二つには皇國の御爲花々敷御出陣遊さるゝ御事の御羨敷私は女の淺間しさ行事叶ず候得共せめては一度夫と定めし御前樣の御すがたな

りとも見んと恥をわすれて參り候へ共何分人目の關にて何事も申し上げず只々御無事の御顔を拜し候のみに候て御名殘おしく存じまいらせ候然し十年以前に縁切りし方が今更みれんがましく御面會にいで候らへば御前樣には老津(村名にて見送人のと)の御方へ對し定めて恥敷思めし御立腹遊され候と後にいたり後悔致し候らへ共早や是非無く候間何卒〳〵御許し下され候よふ願上まひらせ候且又申上る迄御ざなく候らへ共も御身御大切に御養生御專一に遊ばし候てずいぶん〳〵御手柄功名遊され末々迄御名前あげられ候やふ願上げまいらせ候かげ乍ら少しも御早く御無事で御歸國遊ばす樣神かけ念じ待居り參ひらせ候まゝ御手すき有らば御樣子御申越し下され候樣願上げまひらせ候又私事も急に急に清水(町名)へ引越すよふ相なり候故左樣御承知くだされ度候云々

(下畧)

蛙と蜻蜓の舞踏

無言生



今日は日曜の休暇で、降り續きたる雨も止み、空は瑠璃紺色に晴れ渡り、中天には大陽が赫々と耀きて、枯葉を散す風も吹かばこそ、恰も春暖の時候かと怪まるゝ許りなり、青山茂一郎なる一少年、運動を思ひ立ち、上野公園へと志し、東照宮前の老杉古松欝蒼として閑雅なる所の樹の根に腰打ち据へ、林間に囀る清朗たる鳥の聲を聞きながら、四方の景色を眺め、更に餘念なき節しも、顔色頗る憔悴せる一匹の蜻蜓が、朗かなる此日和無名殘惜くやありけん、竊つと枯草の上に止つて居るのを、一匹の蛙が穴の中から見て、何やら獨り點頭き、ノソリ〳〵

と這い出で、

　モシ〳〵蜻蜓さん一寸、

と、優しく聲かけられて、蜻蜓は左も訝しさうに、

是は〳〵蛙さんですか、何御用でムいます、

蛙はニコ〳〵として蜻蜓の傍へ寄り添へ、大きな口を開いて、

何卒御免下さいまし、御覽の通り當年は例年よりメツキり早くお寒くなりました、イヤハヤ風が身にしみ渡り、迚も運動することさへ叶ひません、ですから、一兩日の內に相變らず穴ごもりする積りですが、斯う早くお寒くなりましては、穴ごもりが長くなりまして、屹度穴の中で脚氣症に取つ付れるだらうと思ひます、何うか衞心しなければ宜いがと、今から取越苦勞を致して居ります、僥倖に一命が助つた所で、來年の春は、穴から出るが早いか直ぐ麥畑へでも飛び込むより外、致方がムいません、

如何にも心細げに口說き立てられ、蜻蜓は、

其は御同樣、私などは尙更のこと、此寒さでは一生懸命に力を込めて羽を振つても思ふ樣に飛ばれません、併し貴君はお壽命がお長いから、誠にはやお羨しいことですが、私などは間もなく此世が名殘で、來年になりますると、其は〳〵苦い目をして、他の虫に變化なければなりません、其を思ふと淚が溢れます、

打ち疲れて物語る、此時一羽の鳥が枝より飛び降て、

イヨー、蛙さんと蜻蜓さん、マア御機嫌宜う、今ま上で承はれば、御兩所のお歎は至極御最ですが、是も時節だとおあきらめなさるより外、ムいません、私とても其通りで、段々寒くなるに從つて、餌もなくなり、致方がありませんから、塵芥溜の中から汚穢物でも拾つて、漸々飢い腹を塞いて居ます、併しながら譬にも、運は寢て待て、身を棄て丶こそ浮む

瀬もあれど申しますから、左うクヨ〳〵と御心配なさるのは却つて宜くありません、扨て蛙さんには來年の春迄お目にかゝられませんし、亦た蜻蜓さんは是が一生のお訣ですから、何んぞ賑かに舞踏でもして、一番送別會でも開かうではムいませんか、

烏は何の心にや、頻りと甘く勸むるに、蛙は起立て兩手を擧げ、蜻蜓は羽ばたきをして賛成の心を表し、交口を揃へて、

流石は烏さんだ、至極面白い思付です、ダが如何趣向に致しませう、其邊は貴君から宜い樣に萬事お指揮を願ます、

烏は彌々得意になりて、

早速の御贊成委細承知致しました、そんなら斯うしませう、私は御存の通り舞踏は不意手ですから、お仲間入は出來ませんが、其變り私は聲が惡るくて音調が不味けれど、至つて高聲ですから、囃方になりませう、貴君方は何れも舞踏はお得意ですから、蛙さんは手踊をなさいまし、蜻蜓さんは舞が宜うムいます、

趣向を聞いて、二匹は滿面に笑を含み、烏の右左より詰め寄り、

サテ〳〵烏さんの御趣向は何とも恐れ入りました、けれども素顔で踊たり舞たりした所が、根から氣の利かない一件だが、烏さん何んぞ乙なお考がありさうなものですね、

烏はヨシ〳〵此所ぞと云はぬ許りの顏にて、

有ますとも〳〵、幸此所に捨てゝある手巾の切で、先づ蛙さんは勇み肌に向鉢巻をなさいまし、所で蜻蜓さんは小意氣な頬冠なさる方が至極似合ますよ、

二匹は益笑壺に入り、直に鉢巻と頬冠を致して、手踊と舞の準備に取りかゝりしが、何がさて、何れも目が見えず、痛く困りし樣子にて、

モシ〳〵烏さん、是では真闇でサツパリ見えません
もの、
烏は噴き出しさうな口を押て、
其位でないと實は興がありませんよ、サア〳〵御雨
所とも最うお始めなさいまし、何うもマア御樣子の
宜いこと、サァサ一番陽氣に〳〵、
と、口には云へど、心の内では、此馬鹿めと想へば可笑しくて堪らず、腹を抱へながら、阿房々々と、だみ聲を張り揚げ、頻りに囃し立つれば、二匹は一切夢中になりて、稍暫く狂ひ廻りしが、終には目も眩み、ヒヨロ〳〵として居る擧動を烏は篤と見すまし、時分は宜しと、不意に飛びかゝつて二匹を食ひ殺せり、
此時迄瞬もせず、始終の樣子を窺へ居たりし彼の茂一郎は、何か心に深く感じたることやありけん、悄然として家に歸り、母の前へ坐を占め一禮して、
母樣只今歸りました、
母は縫かけし衣服を下に置き、
何日はいつもより早いの、お
前何うかしましたか、
と問はれて、
エ、何うもしませんよ、
母はシク〳〵と茂一郎の顔を打
ちまもり、
だつて、お前運動に出かけると、いつも夕方迄歸りませんではないか、其に今日は何んだか元氣がわりませんもの、
飽まで吾が身の上を案じる母の言葉に、茂一郎は包まず上野にて目撃したる事ども物語れば母は、
お前其を見て何んと考ました、
慈愛深き母の尋に、
ハイ私は、人も皆彼の通りであるが、小供は尚更無暗に人の口に乗つては不可ませんと思ひました、



母は茂一郎の肩を撫でゝ打ち喜び、お前決して其をお忘でないよ、サア御褒美にお菓子でも進ませう、結構なる菓子を茂一郎へ與へたり、嗚呼茂一郎は如何にも末頼もしき少年なる哉、

歌苑

磯千鳥 (在土浦 岡田花塢)
ありそ海よせてはかへる高浪に立ゐさためす千鳥鳴なり

秋の野(今様体) (同)
つゝりさせてふきり／＼す　はたおる虫の鳴なべに
千種の花の咲いでゝ、　錦をさらす秋の野邊 (信州 松澤かよ子)

冬枯
見渡せばみさりの草木冬枯れて
淋しく見ゆる秋の一ッ家 (同)

山の厂 (同)
山の端に淋しく澄める月かけに
一聲高く渡るかり金

月前述懐 (栃木縣 耕雲迂叟)
蛍なき月のかゝみは物思ふこゝろの影をちゝにうつして

月下擣衣 (同)
我せこか夜寒の夜月かけにうつりゆくらんいもかこゝろの

秋田宗 (同)
うゐしより思ひかけたる秋の田のこかれの色にうつむかりいほ

閑居霧 (在沼津 桃蹊生)
靜けさのいさゝまされと秋霧や
たちへたつらん山かけの庵

月 (同)
招けども傾く影をいかにせん
尾花の末の秋の夜の月

社告

新年附錄　短篇小說募集

一吾社は未だ世に名の知られざる文士人才あるを信するが故に其錦心繡腸を公にせんが爲に特に新年附錄短篇小說を募集す

一報酬にあらず其優等を旌はさんがため左の賞品を定む
(甲)家庭叢書全部十二冊、風雲漫錄及第五國民小說
(乙)吉田松陰及第五國民小說(丙)平民叢書、青年叢書、家庭叢書の内希望のもの四冊

一文躰は何たるを撰ばされど書躰分明なるを要す、制限は三十九字詰十六行一ページの割にて十ページ以下を限る

一本名匿名共に宿所番地の明記を要す、締切期限は十二月十日を限る

一投書家には男女を撰ばす

一毎號歌苑の欄を設け汎く世間に三十一字及新躰歌(短歌)を募集す

十一月十日

家庭雜誌社

平田久著

露西亞帝國

紙數 四百七十三頁
定價 卅五錢 郵稅六錢
肖像 新帝ニコラス二世
地圖 露西亞の膨脹 中央亞細亞の進略 パミール高原 悉比利亞鐵道

各新聞の批評

◎時事●●●●●●●著者の言葉に曰く今日の時勢に於て露西亞の事情を知るは日本の事情を知る所以にして之を學ぶは學問の爲めにあらず實に我等生活の必要に因れりと即ち此書は能く時勢に應じて著はしたるものと云ふべし著者は平田久氏なり

◎教育時論 四百五十六頁の大冊子、是れ平田久氏が露西亞帝國研究の陳渉吳廣たらんとを期して、著したるもの。地理あり、歷史あり、國民の特質あり、日本國民の心得として必一讀すべく、將來露西亞帝國研究の途に上らんと欲するものも、讀んで以て其方針を確定すべし。

◎毎日●●東洋に事多く、遂に露西亞が東洋の政治舞臺に其腕を振はんとする傾向あるに至りしより、露國のとを談論するもの、著述するもの少しとせず。然れども始終相應じ、所論確實なるもの、所謂完成の著述未だ世に公にせられしとなし。然るに頃日民友社員平田氏の著述にかゝる「露西亞帝國」てふ大冊(四百五十六頁)出で、漸くこの感去る、可喜可喜。」今まこの「露西亞帝國」を閲するに、露西亞…………の諸問題に就き頗る叮嚀に論辯されぬ。文章の美、徵證の周到なるには感服の外なし。著者がこの大文字をものせんとて費されし研究考證の勞は定めて容易ならざりしならん。バルカン、印度、朝鮮問題に付き著者の論述されしうちには(六六ページより三〇三まで)、露國に於て曾て耳にするとを得ざるとを多く甚面白し、且つ最も有益ならん云々

◎基督教新聞●●●●●●筆を露西亞の天然に起し其膨脹力、同化力を說きて國民に及び卷頭新帝尼格第二世を總論として掲げ附るに肖像を以てし卷中露西亞膨脹地圖中央亞細亞侵略地圖「パミール」高原地圖悉比利亞貫通大鐵道地圖を挿む全篇四百五十六頁章を別ち節を立つる頗る詳材料の豐富なる優に推して近來の好著と謂ふべし云々

◎神戶實業新聞●●●●●●露西亞てふ名稱は今や我が國人に一種言ふ可らざる感情を惹起し對露西亞策なる者は實に我邦朝野の間に於ける最大至重の問題となり將來に於て我が帝國の國是方鍼を一定するは一に此問題の解釋に待たざる可らず左れど今若し對露西亞策を講ぜんと欲せば須らく露西亞の以て露西亞たる眞相を知るとを要す…………『露西亞帝國』の著者は能く時勢の須要を察し奮ふてこの知り難き露西亞帝國の眞相を究めて之を我が國人に紹介せんことを試み而して亦能くその目的を達したると言ふことを得べし………憶ふにその材料の拾收撰擇は是れ著者が最も苦心を用ひたる所なるべく文章流麗布置亦その當を失はず就中露西亞國民を論ずるの一篇五章は當時佛國經濟學者の泰斗たるポール、ルロアー、ボーリウの同胞にして最も露西亞の形勢事情に精通せるを以て其名聲歐洲諸學者の間に籍甚なるアナトール、ルロアー、ボーリウ氏の原著を露人ラコジン氏が飜譯評註したる『ザール帝國及び露西亞國民』に本きてこの奇恠不可思議なる露西亞國民の性質、氣風、素養、慣習を說明して最もその詳を極む全文の光彩實にこの一篇に在り云々

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社